

ふてゐるのでないか。

かくて自分の信仰が、いはゆる『自力の信仰』であることに気づきましたことは、恰かも新しい智慧であるやうに感じられました。然し、そこには、在來の自分の信仰の矜こゝろりを傷つけられるごとき屈辱さへも感じられました。なほ然し、『救はれてゐる』との矜時こゝろ、その自覺、その信仰の底に、不安と薄弱とが欺きがたく潜んでゐますことは、それが謂はゆる『自力信仰』である何よりも的確な反證であることを、更に何ともし難いのでありました。かく思ひつゝある内省それ自身に於て、既に不安と薄弱との爲に動搖してゐる自分に他ならぬのを、すべて餘儀なく私は見ました。さうして之等の分別の爲に少からず疲れてをりました。

親鸞は私を崩す。……然し、私がイエスに依る眞の信仰を恵まれてゐるならば、たとひ何ものにも觸れようと、かりそめにも動搖することは斷じて無い筈である。「愛」に於て、「信仰」に於て、かく親鸞の前に、自分の崩壞を感じるのは、自分の信仰が未だイエスの内に完全に樹立してゐない爲なのだ。

こゝに私は自身の崩壞を防ぐべく全力をあけて更に踏み止まらうとしました。同時に、淳な

る、決定せる、相續すべき信仰を、イエスの内に完全に攫むべく、たゞ祈りの他に、進むべき路は私に無いのでありました。

第五章

我れ爾らに言ふ もし何にても爾ら父に請求せば

彼れ我が名に於て爾らに與へん

イエス

佛號むねと修すれども 現世をいのる行者をば

これも雜修となつてぞ 千中無一ときらはるゝ

親

「さて、常に祈りて倦むべからずとの事の比喻を、イエス、彼等に語り居たり。曰く、

『或る町に於て。 神をも畏れず、人をも敬はざる或る判事ありき。 また、その町に於て、

寡婦ありき。 而して、絶えず、彼れ（判事）のもとに來りて、言へるは、

『爾、わが對手を處分して、わが爲に、理非を正せ』

而も、彼れ（判事）久しく肯ぜざりしが、その後、自ら言へり。

『たとひ我れ神をも畏れず、人をも敬はざれども、尙ほこの寡婦、我れを煩らはすを以て、彼女が絶えず來りて我れを惱まさるやう、我れ彼女の爲に、理非を正さん』

さて、主、言へり。 爾等、何を不正なる判事の言ふかを聞け。 それ神は彼れ（神）の選める者の爲に、たとひ久しく忍び居るとも、晝も夜も、彼れ（神）に呼ばはり居る彼等の理非を、必ず正さざらんや。 我れ爾等に言ふ。 彼れ（神）速かに彼等の爲に理非を正さん。 併し、

Faint, illegible text on the left page, possibly bleed-through from the reverse side.

祈りつゝ
強者 弱者
死肉の喘ぎ

人の子（イエス）來るとも、其の時、彼れ（イエス）地上にて信仰を見出さんや』

「さて、イエス、又、己れを義人なりと思ひ込み、かつ餘の者を、蔑ないがしろにせる或る者に向ひて、この比喩たとへを語れり。

『二人の人、祈らんとて、宮ヒエロにへと上れり。一人はパリサイ人にして、一人は税吏みつきとりなりき。パリサイ人、勇み立ち、此等の事を、己れに向ひて、祈り居たり。

『神。我れ餘の人々、即ち、掠奪する者、不正の者、姦淫する者等の如く、或は亦、この税吏の如くにも非ざるを、我れ爾に感謝す。我れ一週に二回、斷食し、我が得る程の物は、我れその十分の一を獻ぐ』

されど、税吏、遙かに立ち、敢て目を天にへと舉げんとせず、たゞ己が胸を打ち居りて、言ひけるは、

『神、この罪人なる我れを宥恕せよ』

我れ爾らに言ふ。此者は彼者よりも義とせられて、己が家に下れり。これ凡そ己れを高くする彼れは、卑くせらるべければなり。されど、己れを卑くする彼れは高くせらるべければな

り。』

イエスは言ひ給ふ。常に倦むことなく祈れ。己れを卑くしてと。さうして猶ほ、

『爾等の中、誰れか、友を有たん。而して、彼れ、夜半、友の許に進まん。而して、

『友よ、爾、我れに三のパンを貸せ。これ我が友、旅路より我が許に着きたれども、我れ彼れに供ふべき物を有たざるが故なり』

と、彼れに言はゞ、その友、内より答へて、

『爾、我れを煩らはしをること勿れ。戸は既に閉ぢられたり。わが嬰兒こどもら、我れと共に寢

室に在り。我れ立ち上りて、爾に與ふること能はず』

と言はんか。我れ爾らに言ふ。たとひ彼れの友なるが故に、立ち上りて彼れに與へざるも、彼れの耻知らずの故に、起きて要する程の物を彼れに與へん。

我れまた爾らに言ふ。爾ら請求し居れ、さらば爾らに與へられん。爾ら捜し居れ、さらば爾ら見出さん。爾ら叩き居れ、さらば爾らに開かれん。そは凡そ請求しをる彼れは受け、捜しをる彼れは見出し、叩きをる彼れには開かるべければなり。さて爾らの中、誰か父たる者、

その子、魚を請求せんに、などて彼れ魚の代りに蛇を授くべき。或ひはまた卵を請求せんに、などて彼れ蠍さそりを授くべき。されば、爾ら悪しき者ながらも、善き賜ものを、その兒らに與ふるを知らば、まして天の父は、彼れを請求し居る者に、聖靈を與へざらんや』

倦むことなく常に祈れ。心を卑くして、求めよ！ 搜れ！ 叩け！

イエスの聖語は、そのまゝ私を更に激しく勵ましました。

親鸞は崩し、イエスは勵まし給ふ。

——『主は近し。何事をも思ひ煩らふな。たゞ事ごとに祈をなし、願ねがひをなし、感謝して、爾の求めを神に告げよ。さらば凡て人の思ひにすぐる神の平安は、爾らの心と思ひとをキリスト・イエスによりて守らん』——『常に喜べ、絶えず祈れ、すべてのこと感謝せよ』——『望みて喜び、患難に耐へ、祈を恒つねにし』かく言ひし使徒パウロは、不斷の祈に生きてゐた。イエスは、人を避けて、山に上り、獨り夜もすがら、または未明より、いつも獨り祈り給ふた。さうして、『もし爾ら何をか我が名に於て我れに請求せば、我れ必ず其の事を爲さん』——『アーメン！アーメン！ 我れ爾らに言ふ。もし何にても爾ら父に請求せば、彼れ我が名に於て爾らに與

へん。唯今に至るまで爾ら何をか我が名に於て請求せざりき。爾ら請求せよ。さらば爾ら受けん。これ爾らの喜悅の全くせられんが爲めなり』このイエスの疑ひを絶する言を見よ。祈れ！ 疑惑を棄て、聽かるべき望みに充ちて祈れ！ 更に使徒ヨハネの言を聽け、『我れらが神に向ひて確信する所は是れなり。即ち御意みこころにかなふ事を求めば、必ず聽き給ふ。斯く求むるところ、何事にても聽き給ふと知れば、求めし願ねがひを得たる事をも知るなり』私に不斷の信仰を與へ給へと祈る。この祈が御意に背くのであらうか？ 否、この願ねがひをこそ、神は容ゆるし給はねばならぬ。——

父よ。

愛にあり給ふ父上よ。

父上よ、讀よむべきかな、讀めまつるべきかな。

おゝ、爾の聖名を崇めさせ給

へ。



父上よ、爾を崇め、爾を仰ぎ、爾の聖旨にまかせ、爾の愛の乳房ちちのうでに吻くちつけんといたします

者が、こゝに一人ございます。

父上よ、顯はに全く照覽あらせ給ふ爾のみまへに、この一人の潔く、玷なく、爾の御乳によりて育ちしまゝにあるべきやう、御能を下させ給へ、思召を垂れさせ給へ。そこに主の御榮を顯はさしめ給へ。主の在まし給ふ聖旨を成さしめ給へ。

天地を舉りて萬有は斯く祈り叫び上ぐ。——主のみこゝろのまゝに生きしめ給へ。父よ、爾が、この萬有を造り給ひければ也。爾の覽たまふ此の最も小さき一人の、衷に賜はりし無始の光も、『主のみこゝろのまゝに生きしめ給へ。主のみこゝろのまゝにあれかし、成れかし』とぞ、不斷に叫ぶ。

父上よ、爾は、この叫びを聴き知り給ふ。爾より出で、爾を慕ふ、爾の造り給ひし叫び、造られしもの、造りし親を慕ふ叫び、この叫びを、爾は聴き知り給ふ。爾より出で、爾に歸る叫び！

父よ。我は爾に造られし最も小さきものなれども、真心こめて、我を献けて、叫ぶ。

父上よ。その獨子を、世に賜ひしまでに、人を愛し給ふ父上よ、その獨子のみためにこそ、

この最も小さき一人を犠たらしめ給へ。穢れあれば、御能なる主の血によりて濯ひ給ひ、罪は主の十字架に釘けられたれば、なほ御能により大いなる愛により、聖旨に適ひ得る者と成し給ひて、この一人を、主のみまへに献けしめ給へ。

父上よ、父上よ、わたくしを聖旨に適ふ者と成し給ひて、主のみこゝろを成さしめ給へ。こは我が衷なる光の祈り、爾の造りあたへ給ひし光の叫びなり。

この祈り、主は悦び給はん。主よ、みこゝろを成さしめ給へ。地の爲に十字架に上りたまひし主よ、この地を潔めさせ給へ。この一人を、爾の十字架の末に釘け給ひ、地の鹽の一片となし給へ。みこゝろに適はゞ、この一人を、みこゝろに適ふ者たらしめ給へ。

死のうち在りし此の一人を、遂に、生きしめ給ひし主イエス・キリストよ。生きし我が生命は、爾にて在ます。主よ、主よ、主よ、爾の他に、私なし。

父よ、主の他に私なき我を、主のみために動かしめ給へ。天地も悦べ、天國の歡樂！こゝに一つの靈、甦へれり。主を讀へよ、主を讀へよ、主を讀へよ！

甦へりしわが靈は、父のみもとに趨る。そこに主まします。父の獨子、萬有の主、父と共

に在まし、わが靈に息ふき給ひて、我を主の御有とせしめ給ふ。主の一人として、我は主の一人として、主と共に父のみこゝろを嗣ぎ成し奉る一人として、こゝに地上に還りきたる。主息ふき給へば、聖靈わが靈のうちに充たされこもりぬ。神よ、獨子よ、聖靈よ、聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな！ 愛なるかな、愛なるかな！ 愛なるかな！

父上よ！

あゝわが愛の父上よ。爾は靈にて在ませば、靈の祈りに應へ給ふ。

靈の祈りは、われ等を救ひ給へ、人類なる地上の人みなを、愛の救ひの御手のうちに抱き給へと祈る。父よ、御國を臨らせ給へ。我等みなを、御胸のみもとに歸らせ給へと祈る。人みなは、御胸のみもとを離れて、さまよひ出でし神の子なり。罪あるものを矜恤みたまへ、愆ある者を憐みたまへ。主を仰がしめたまへ。あゝ十字架の光を輝かしめ給へ！

父の獨子イエス・キリスト、父の聖旨を啓き示し給ひぬ。父の恩寵、父の眞理、父の愛、イエス・キリストとなりて地上の人となり給へり。父の獨子、父を説き給ひ、萬人の罪を任ひ給ひて贖ひの死に就き給ひ、復活の御榮によりて、父と人みなとの愛の途を開き給へり。人類の救

拯こゝにあり。わが父上よ、この至愛至大の大能、至聖のみわざを成させ給ひし父上よ、その大能の同じ御手をもて、この一人にも、主のみわざを、願はくは成さしめ給へ。こゝに私あり、父上よ！

主のみために、私を殺し給へ！ 主のみために、聖旨に適はゞ、私を十字架の上に生きしめ給へ！

聖なる父上よ、靈なる父上よ、愛なる父上よ、みこゝろは主イエス・キリストにあり。

「彼にならへ、彼のごとかれ」こは爾の御言なり。主よ、爾の如くあらしめ給へ、これ父のみこゝろなればなり。あゝキリストの人たらんこと、これ萬人のうへの使命なり、主は讀むべきかな、主は讀むべきかな、主は讀むべきかな。主よ、死より生に眼覺ませ給はりし私に主のみこゝろを接けしめ給へ。主のみこゝろをのみ、こゝろとせしめ給へ。萬人を愛せしめ給へ。潔からしめ給へ。玷なからしめ給へ！

祈りを呼吸し、キリストに生き、萬人を愛せしめ給へ。アーメン。

弱	強
者	者

主、われに在り。 わが衷にいます。
 わが主、わが衷にいます。 主は、わが主なり。 この我は、主の我なり。
 主は近し、瞳より近し、呼吸より近し。 わが生は主の生なり。 主、われに
 臨りて茲に生き給ふ。 主よ、主よ、わが衷にいます主よ！
 わが主よ。

われ、いま我が衷にいます主を、親しく見まつる。

『我儕その榮を見るに、實に父の生み給へる獨子の榮にして、恩寵と眞理とにて充てり』(約翰
 十一章第十四節) この主、いま我が衷に在ますを知る。

主よ。 イエス・キリストよ。 神にして人に在まし、主よ。 神にて在ます爾の僕たり、人
 にて在まし、爾の友たり得る、この一人の最も小さき弱き者の上に、聖旨を成し給ひて、この最
 も弱き小さき一人を強からしめ給へ。

私の内にも外にも、いろくの心々や事々が、しきりに繞り圍むでゐるけれども、主は、恒に

私を愛し給ひ、恒に私の中心に立ち在り給ふ。 光よ、途よ、眞よ、生命よ、永生よ、愛よ。

いろくの心々も、事々も、盡く常に常無く、さまのくの姿をして、朝に來つて夕に去る。 し
 かも、主のみは恒に私れを愛し給ふ。 主は、私の永き生命である。 眞である。 途である。

光である。 永遠の愛である。 斯くて世は寂しからず、私は進む。 『爾曹世に在りては患難を
 受けん。 されど懼るゝ勿れ。 我すでに世に勝てり』この言を、わが衷の主は今も宣ふ。 恒

に宣ふ。(約翰傳第十六
 章第三十三節)

『我すでに世に勝てり』との主が、わが衷に在ます。

われは強し。

限りなく強からざるべからず。

祈れ！

救世軍の創始者ウイリアム・ブース大將の嗣子プラムエル・ブースは、傳道の前に居室に入りて

獨り祈り、その出で来りし時には、聖靈の力に充ちて、彼れの説教を聞き、彼れに接する人々を必ず動かした。ある人が彼れに尋ねた。

『その力を貴方は何處から得てくるのか？』

『神の中より、祈によりて』

『いかに貴方は祈るのか？』

『神と角力すまよをとりて』

この意味の逸話が、私を激しく動かしてをりました。そこに併あせ記されてありました『祈は神を動かす』との意味の言と共に。

神と角力をとれ！ 神を動かせ！ 不斷に不屈不撓に祈れ！

日に六時間を祈りしと言ふマルチン・ルーテル。祈によりて數萬の孤兒を育てあげ、生涯の中に祈の聽かれざりしこと僅に二回なりしと告白せしジョージ・ミュルラーなど、祈に関する感激の崇い逸話の多くが、更に私を勵ましました。また實に聖書の中より『祈』に関する言を抜き去るならば、聖書は離れぬに裂け散るべく、『祈』は聖書の中の關鍵を成し、同時にキリス

ト教の基調を成す最も重要な素質の一つであることが、今更に自身の上に新しく知られるのでありました。

祈り無しに自分無きまで祈れ！

また實に、信仰の動搖する不安と薄弱とに、悩みつゝある私には、その悩みに迫られ、たゞ祈らずにゐられないのでありました。

わたくしは殆んど八ヶ月の間を、言どほりに『晝も夜も』祈りました。一日を二食に、または一食に、ある時は終日を斷食して祈りました。未だ曾て覺えざりし熱情、幻想、恍惚、さうしてまた、鞭うたれるごとき暗黒が、時々、前よりも烈しく襲ひ來り、その暗の底に、祈るにも祈り得ず只だ蛙のやうに俯してゐる自分を私は前よりも甚しい幻滅と共に觀ました。

死	肉
の	
喘	ぎ

祈りまつらん、祈りまつらんとは、思ひ努めつゝも、わがこゝろ鈍く濁りて、父のみまへに出づること能はず。不純なる、潔からぬ曇りと柔なやれとに掩はれて、いたづらに只だ擾亂す。

いかなれば斯くも擾れ碎かるゝぞ、わが心のおどましさに、更に惱みつゝも、猶ほ擾れ猶ほ曇る。

憂ひ無し、寂しさも有らず、悲しみ哀しまん何事をも覺えず、なほ且つ心擾れて曇る。お、父よ、何處に在ますぞ。迷へり、迷へり、迷へり、迷へり、漠々として空を掩ひ奔る雲々の中に、獨り迷ひつゝ風と共に雲に埋めらるゝ如し。只だ行くへも知らず四邊も知らず、掩はれ且つ蔽はれて我れをも失はんとする此のこゝろよ。知らず、知らず、知らず、何をか知らん、唯だ我れの掩はれ蔽はれて迷へるを知るあるのみ。

かくも掩はれ迷へるものは誰か。舊き我れの死肉が、やゝもすれば、風に動かされて舞ふのか。お、彼れをして舞はしめよ。何をかすらん、只だ舞ひて只だ消えゆくのみ、永へに残ることなし、暗より暗へ、影のごとく動く、死肉の喘ぎのみ。

十字架に上れ！ 山中峯太郎——

こゝに、自身の信仰は、前よりも長き時間に及びて失はれ、ある時には二日餘りを、たゞ喪心したやうに、祈り得ざるために祈り無く、やがてその祈りなき中より、氣力を勵まし搾り出すべく、そのために昏く憺亂したかのやうに、立ちあがつたまゝ上を仰ぎ、天井の隅より隅を速りに見まはしながら、自分で何かを叫んでゐるかのやうな、それでゐて聲は聞こえずにゐます、狂はしい自分の現實に、漸く氣づいて愕き、足もとに忽ち坐つたりしてをりました。獨り居ます環境、そこは祈の絶好の場所のやうに思はれてゐました。さうして、この八ヶ月の間、親鸞より私は全く離れてをりました。

求めても、捜しても、叩いても、不斷の信仰的意識は自分に與へられぬ。自分の祈りには、どこかに不完全な不純な缺陷があるのではないか？

この疑惑に、私は漸く衝きあたりました。さうして、「詩篇」のうちに、

「神よ、わが祈りをきゝたまへ。願はくは我が號呼の聲の御前にいたらんことを。わが窮

苦の日、聖顔を蔽ひたまふなかれ。なんちの耳を我れに傾け、わが呼ぶ日に速かに我れに應へたまへ。わがもろくの日は煙のごとく消え、わが骨は薪のごとく焚かるゝなり。わがころは草のごとく撃たれて萎れたり』

など書かれてあります苦惱が、そのまゝ自身の上を感じられました。さうして、

祈りが不完全のために、または不純のために應へられぬとするならば、即ち祈りの完全と純なるを待ちて初めて應へたまふ神ならば、それは行路病者が斃れて初めて其れを救ふごとき非實在な彌陀佛と、何の選ぶところがあるのか？

閃くごとき悪魔的な不遜な疑惑が内に催し、そのために私は悚然と心寒く慄へました。

見よ、かくも不信仰な自分なればこそ、自分の祈りは遂に不純なのではないか。信頼に缺けそのためにこの如き不遜な疑惑を思はうとする。

頭をかへて唸きながら轉けまはりたいやうに私は思ひました。然し、

かくも不信仰な自分なればこそ、不斷の信仰を與へ給へとのみ自分は祈らずにゐられぬ。また祈つてきた。祈りつゝある。然も見よ、自分は猶ほ此のごとき悪魔的な、神を試みるご

とき、神を批判するごとき心を、たとひ一瞬なりとも萌してゐる。これは何と言ふことなのか？

祈れ！ 更に祈れ！ 祈らねばならぬ。自分を見ずに祈れ！

然し、そこに私は既に内も外も殆ど疲れきつてをりました。祈るべき氣力を勵まさうとする其れだけでも、實に少からぬ強行的な努力があるのであります。「祈れ」この意識それのみに於て、殆ど耐へ得ぬほどの重荷であることが感じられるやうになつてをりました。

私は祈る。然も、祈りのうちから、不信仰な不安な自分が湧くやうに現れる。疲れに従つて濃厚に現れる。不斷の信仰を與へ給へと祈りつゝ、その裡から、自分を裏ぎる悪魔的な不安が、制しがたく現れる。自分を見るな。然し、自分を見ずにはゐられない自分を更に觀る。

繩のやうに結ばれてゆく祈りと不安との間に、私は縛られてをりました。さうして、聖アウガスチンの回心のために、數十年を祈りしといふ母のモニカの忍耐が、ひたすらに渴仰されました。

僅かに八ヶ月の祈、さうして疲れてゐる。あまりに自分が弱いではないか。耻ぢよ、祈りより祈りへ進め！

喘ぎつゝある馬が背を鞭うたれるやうに、私は更に奮ひたつべく、その氣力の回復の爲にも祈りました。こゝに三ヶ月が過ぎました。さうして、疲れと共に、祈りに進み得ざるのみならず、かへつて墮落するごとく、前よりも屢々する間歇的かんけつてきの祈り得ざる、暗黒に襲はれてをりました。そのうちに、ある水曜日の夜に富士見町教會の祈禱會に出てをりました時の凡そ一年前の記憶が、たま／＼思ひ出されました。植村正久先生を中心とし、二三十人の信者たちが長椅子に腰をおろし、ある一人が祈り終れば、更に一人が次ぎに祈るのでありました。切々と訴へるやうに、すがるやうに、咽ぶやうに、強く、熱心に、感激に顫へて、十數人が次ぎ／＼に誰れもが敬虔な聲と共に祈られました。その一時間餘りの始終を通じて、すべての人々が、私も、頭を下けて凝然と腰をかけてゐるのであります。やがて植村先生が祈られまして、皆が顔をあげました。この一時間の祈りのあひだに、自分は眞に純なこゝろでゐたらうか。祈りのうちに居たらうか。おもはず顔を赤くしまして、周囲の人々を私はそつと見ました。誰れの表情も敬虔に祈りこゝろに充ちてゐられました。

あの時にも、信者たちは皆が何の障りもなく満足に祈つてゐられた。自分には、祈るべき素質が生來に缺けてゐるのではないか？

祈りの素質に乏しい自分を、わたくしはこの前後一年の後に餘儀なく觀ました。さうして、ある日の深夜に、剛に立たうとしまして床を離れました刹那に、腦貧血の爲でありましたか、心臓の上を壓されるやうな苦痛と共に倒れました。そのまゝ床に入りまして、かの襲ひ來る暗黒の寂しさのうちに、二時間あまり沈んでをりました。

左の手頸を、右手に握り、自分の脈搏を測りながら、私は暫く横を向いて寝てをりました。

弱く流れてゐる動悸が、かすかに指さきに觸り、そこに私は、さうしてゐる現在の自分を、そのまゝにヂツと冷たく視てをりました。さうして、癒えがたき缺陷のひびが生まれながらに深く入つてゐる自分を抽象的に見ました。

何のひびか？

これには答へ得ずに、あだかも一つの陶器が、既に最初より大きなひびを、上より底へ斜めにもち永く不完全なものとして放棄されてゐるかのやうな自分であることを、私は只だ渴いた氣もちで知りました。

救ふと言ふ。然し、この自分の生來のひびは癒やされぬのではないか？

夜の空のすべてを掩ふて降りてくるやうな、かの寂しさに、私は不可抗的に包まれました。

祈れ、然し祈るべき氣力も既に失はれてゐました。さうして、一時に、嘗て有りし次の事が、圖らずも想ひ出されました。

實家の屋根の上に、疊四つが敷かれます程の廣さの物干臺ものほしだいが有ります、家の人々は其れを『火の見』と呼んでゐました。夏の夜に、この火の見は最も良き納涼所になります。父は時々火の見で晩食をとり、東の方に大坂城の天主臺を、西の方に兩本願寺の別院の大きな臺いづらを方々の煙筒のあひだから夕空に眺めながら、ゆつたりと箸をあけてをりました。幼年學校にをりました時、ある年の暑中休暇の夜、私は遊びに行つてゐました實家の火の見に、獨り昇つてをりました。星のみの空、白い銀河が一方から一方へ流れてゐました。敷いてあります革布團の上に顔を俯せて私は暫く祈つてをりました。

『祈りなさい！ 祈らない人は死人です』

その時の私の先生でありましたドイツ婦人のエリサベス・フリーホルドさんは、日曜日の午後

の私一人に對する聖書講義の後に、必ず然く訓されました。

生きてゐる人は祈る。さうして私は機會のあるごとに祈つてをりました。

やがて母が火の見に登つて來しりました。それを知りませぬ私は、聲に出して暫く祈り、祈り終つて顔をあげました時に、階段の上に立つてゐます母の上半身と、その微笑してゐます顔を、星あかりに見ました。

『何を言ふてゐましたのや？ 獨りで』母は笑ひながら上つてきました、その右手に、私の好きなビスケットの罐をさけてゐました。

『祈つてゐたんです』

『誰にな？』母はさも面白さうに尋ねながら、わたくしの傍に坐りました。

『神に祈つてゐたんです。神は僕の父ですから』

『さうかいな。祈らねば聽いて下さらん神さまが何になるね』と母は極めて心易く言ひながら、罐を開いて私の膝の前に出しました。さうして、獨言のやうに、

『祈らねばならんといふのは情ないことやな』と、靜かに呟つぶやいてゐました。

神に就いて、イエスに就いて、祈りの意義に就いて、何も知らぬ筈の母、それは異端者の眞宗信者の老年の母から、事もなげに然く言はれましたことを、ひそかに憤慨しながら、私は黙つてピスケツトを摘まんでをりました。

この火の見の上の記憶が、明かに想ひ出されました私は、更に後の日に、あらゆる宗教のうちに浄土眞宗のみが祈りの絶無であることを何かの書物（高楠さんの「佛教國民の理想」）に就いて讀みましたのを、續いて想ひ出しました。

親鸞は祈らなかつたと傳へられる。果して然うなのか。何故にか？ 祈り無き信仰が有るのか？

祈りの絶無であると言ふ信仰、それは有るべからざる存在を見るごとき、極端な矛盾が私に感じられました。然し、自身が祈りに苦しみつゝある現在に於て、祈りなき信仰に生きありし如き親鸞に、前に離れて凡そ一年の後に、私は再び牽かれ初めました。

第六章

真理に於て 爾(神) 彼等(人類) を聖ならしめよ

我れ彼等の爲に己れを聖む これ彼等もまた

真理に於て 夙に聖められんが爲なり

淨土眞宗に歸すれども 眞實の心はありがたし

虚假不實のわが身に於て 清淨の心もさらになし

眞

イエス

Faint, illegible text on the right page, possibly bleed-through or a second exposure.

凡そ一年のあひだ、祈りながら其の祈に蹉いてをりました私は、充たされざる祈の惱みと共に、なほ更に、自身の醜悪さを見なければならぬことにも、殆んど疲れきつてをりました。これらのすべてが、自身が自身を餘儀なく虐げ、その苦痛の下に喘ぎながら、それだけ更に自身を虐げずにはゐられない自縄自縛の筈に陥ちてゐるのであります。

『真理に於て、爾（神）彼等を聖ならしめよ。爾の言は真理なり』——『我れ彼等の爲に己を聖む。これ彼等もまた真理に於て、夙に聖められんが爲なり』

イエスの此の祈りは感激深く私の内に刻みつけられてをりました。

聖ならしめよ！ 聖められよ！

この言は、まことに自身の衷心の願ひと、正しく一つになり得るイエスの祈りと命令なのであります。更に使徒パウロの言、

『されば兄弟よ、われ神のもろもろの慈悲によりて爾らに勸む。己が身を、神の悦びたまふ潔き活ける供物として、獻けよ。これ靈の祭なり』

潔き活ける献身、その體現者たりし使徒パウロの十字架上の生涯こそ、私自身の後半生の爲の

1. 1934年10月10日 晴 10時 10分
 2. 1934年10月10日 晴 10時 15分
 3. 1934年10月10日 晴 10時 20分
 4. 1934年10月10日 晴 10時 25分
 5. 1934年10月10日 晴 10時 30分
 6. 1934年10月10日 晴 10時 35分
 7. 1934年10月10日 晴 10時 40分
 8. 1934年10月10日 晴 10時 45分
 9. 1934年10月10日 晴 10時 50分
 10. 1934年10月10日 晴 10時 55分
 11. 1934年10月10日 晴 11時 0分
 12. 1934年10月10日 晴 11時 5分
 13. 1934年10月10日 晴 11時 10分
 14. 1934年10月10日 晴 11時 15分
 15. 1934年10月10日 晴 11時 20分
 16. 1934年10月10日 晴 11時 25分
 17. 1934年10月10日 晴 11時 30分
 18. 1934年10月10日 晴 11時 35分
 19. 1934年10月10日 晴 11時 40分
 20. 1934年10月10日 晴 11時 45分
 21. 1934年10月10日 晴 11時 50分
 22. 1934年10月10日 晴 11時 55分
 23. 1934年10月10日 晴 12時 0分
 24. 1934年10月10日 晴 12時 5分
 25. 1934年10月10日 晴 12時 10分
 26. 1934年10月10日 晴 12時 15分
 27. 1934年10月10日 晴 12時 20分
 28. 1934年10月10日 晴 12時 25分
 29. 1934年10月10日 晴 12時 30分
 30. 1934年10月10日 晴 12時 35分
 31. 1934年10月10日 晴 12時 40分
 32. 1934年10月10日 晴 12時 45分
 33. 1934年10月10日 晴 12時 50分
 34. 1934年10月10日 晴 12時 55分
 35. 1934年10月10日 晴 1時 0分
 36. 1934年10月10日 晴 1時 5分
 37. 1934年10月10日 晴 1時 10分
 38. 1934年10月10日 晴 1時 15分
 39. 1934年10月10日 晴 1時 20分
 40. 1934年10月10日 晴 1時 25分
 41. 1934年10月10日 晴 1時 30分
 42. 1934年10月10日 晴 1時 35分
 43. 1934年10月10日 晴 1時 40分
 44. 1934年10月10日 晴 1時 45分
 45. 1934年10月10日 晴 1時 50分
 46. 1934年10月10日 晴 1時 55分
 47. 1934年10月10日 晴 2時 0分
 48. 1934年10月10日 晴 2時 5分
 49. 1934年10月10日 晴 2時 10分
 50. 1934年10月10日 晴 2時 15分
 51. 1934年10月10日 晴 2時 20分
 52. 1934年10月10日 晴 2時 25分
 53. 1934年10月10日 晴 2時 30分
 54. 1934年10月10日 晴 2時 35分
 55. 1934年10月10日 晴 2時 40分
 56. 1934年10月10日 晴 2時 45分
 57. 1934年10月10日 晴 2時 50分
 58. 1934年10月10日 晴 2時 55分
 59. 1934年10月10日 晴 3時 0分
 60. 1934年10月10日 晴 3時 5分¹

聖 聖の同化
 神 の 續
 霞 露の微心
 幼き真の火

模範として、その献身奉仕の新生の道へ出發すべく、先づ自身の信仰を強烈にし、同時に、自身の内外の聖潔ならんことを、クリスチャンの一人として、私は必然に祈つてをりました。そこに自身の識らざる大きな自負と驕慢が潜んでをりました。然し、自身が讀みます「聖書」は、その私の自負と驕慢とを、十分に刺戟し激成せしめ、而も其の自負心また驕慢な祈の充されぬ爲めに、かへつて深き罪を自ら掘つて陥ち、そこに獨り徒らに苦しんでゐるのであります。

聖	靈
の	
同	化

『夫れ我は生くと雖も、最早や我に非ず、キリスト我に於て生き給ふなれ』と、使徒のパウロは述べた。キリストの心になつて生くべきが、キリストを信ずる者の生きかたでなければならぬ。キリストを信すればキリストとなる。

即ち、信じてキリスト化せられなければならぬ。然し、愚昧劣機な私は、この昨今を、然くしてはるなかつた。

キリストと偕に十字架につき、キリストと同心に蘇へらんこと、そは全心をあけて主キリストを愛し奉るにあることを知りながら、然し私は、依然として自分の力で自分を十字架に釘けよう

としてゐた。さうして自分の心をキリストの心に、自分の力で同じうせんことを努めてゐた。

また自分で自分を鞭うつて、キリストを愛せしめようと自分で努めてゐた。そこに依然として、自我の影が未だ絡みついてゐた。あくまでも自分の力を基にしてゐるのだつた。それは信じてキリストの聖靈の力によつてキリストに化せられる所以では、決してなかつた。

元來が罪に生まれた自分が、如何に長く獨居して、目を張り奥歯を咬みあはして、キリストと同心ならんことを努めつくさうとも、その罪の自分の力のみでは、元來の濁水をいつまで永くかきまわしてゐようとも、それは遂にいつまでも濁水であるのと同じことである。濁りの清く化することは永へにない。自分は遂に自分に終はることを知らねばならぬ。

人は本然に歸らねばならぬ。そは神の有になることである。即ちキリストの有にならなければならぬ。その爲には我をさへけてキリストを信じ奉らなければならぬ。キリストを信じ奉ることによつて、そこにキリストの聖靈に同化せられ、斯くて即ち『夫れ我は生くと雖も、最早や我に非ず、キリスト我に於て生き給ふ』のパウロの心境に詣り得るのである。それも元より自分の力によつて詣り得るのではなく、主を信じ奉ることによつて、主の聖靈の能きによつて

然く爲られ得るのである。これを私は錯まつてゐた。それと氣がつかずゐて依然として自分の力で、キリストに詣らんことを努めてゐた。階梯なしに天に昇らんことを思つてゐたのである。

信仰による聖靈の同化、こゝにキリストの世に於ける生命が現はれる。キリストは全人類の罪を任ひ給ひて、全人類を同化し給はんとす。私は今朝ペテロの前書を読むだ。その中に『恰も生まれたての嬰兒の如く、質ひなき靈的の乳汁を冀へ』と、使徒のペテロは書いた。かくして、始めて、キリストの聖靈に化せられんことを願ひ得るのであつた。

見よ、頑くなゝる自分を見よ。自分は、主の十字架を、負はずして、自我の罪の十字架を負ひ、さうして自ら徒らに苦るしんでゐる。あはれむべき罪ある愚者よ、その罪の汚れた十字架を棄て、主を信じ奉る聖き十字架、それは主の御爲の眞の意味の苦るしき十字架を負へ。その苦るしみのうちに主の愛を知り、信仰と行ひとによつて主に近づき、さうして主に同化せられんことを祈り奉れ。

「聖潔」Ⅱ「成聖」について、わたくしはマグドナルド氏、およびブレンゲル氏の次ぎの體的敘述から、深い印象を刻まれてをりました。

- 一、新生に於ては罪が支配をしなくなり、成聖に於ては罪が存在しなくなる。
- 二、新生に於ては罪が降服したもので、成聖に於ては罪が撲滅せられたものである。
- 三、新生に於ては、憤怒、高慢、不信、嫉妬などの不都合な欲望が抑制されたもので、成聖に於ては、それが取除かるゝものである。
- 四、新生とは故意の犯罪より救はるゝことにて、成聖とは罪の存在より救はれることである。
- 五、新生とは舊い人を束縛することにて、成聖とは舊い人を放逐し其の所有を没収することである。
- 六、新生は成聖の始めにて、全き成聖とは其の工の成就された有様を言ふのである。

ある聖潔會にて、八十餘歳の一人の老信者が申すには、「私は聖潔を信じてをれども、あなた方の言はるゝ如く、それを忽ち一時に受けられるものとは思はぬ。だんくゝ成長して之れに達すべきものと信じます」とのことであつた。これは世の中に最も普通の誤解にて、これが爲に幾萬の人々は聖潔を受け損なふてゐることでもあります。これは罪の限りなく憎むべきこと、また唯だ單純な信仰の道によりて罪を打ち碎き得ることゝを、兩つながら、認めぬものであります。

全き聖潔とは減いて加へる瞬間の算用である。

聖潔とは先づ「凡ての怨恨、凡ての詭譎、また偽善、媚嫉、およびすべての誘言」(メテロ前書二〇一) 即ち實際上、すべてキリストに似ぬ悪しき性質と、利己の慾望とを棄て、靈魂を清められることである。かくの如く聖潔の半面の悪い物を取り除くことであるのに、之れに反して成長とは増し加へることであるから、成長によりて潔めらるゝといふはずがないのであります。

聖書に又、「爾ら今は凡て此等の悪しき事、および慳、忿怒、暴戾を去り、謗言、醜言を去るべし。爾ら既に舊き人と其の行を脱ぎ」云々(コロサイ書三〇八、九)とあり、即ち使徒は外衣を脱ぐ如く罪惡を脱ぎ去れと申したのである。然るに外衣はだんくゝ脱ぐものでなく、一度に思ひ切て、直ぐ脱ぐことができる如く、罪惡も亦その通り直ぐ取去ることのできるものである。而して是は聖潔の減算の側面であります。

聖潔の加算の側面については、同じ使徒が語を附け加へて「是故に爾ら神に選ばれて、聖く、且つ愛せらるゝ者となりたれば、慈悲、矜恤、謙遜、柔和、忍耐を衣よ」(コロサイ書三〇十二)と申しました。これはまた人が新しい外衣を着ることに喩へて言ふものにて、新しい外衣を着ることは亦、舊い外衣を脱ぐ時と同様、段々ではなくて、一時のことである。かくの如く聖潔は一時に受らるゝものであります。聖潔を得て後にこそ成長はあれ、決して成長によりて聖潔に達するものではありません。水の中でこそ泳ぐことはできますけれども、水のある所まで泳いで行かぬはすのものではない。

庭園の雜草はだんくゝ一つ宛つむよりも、鋤と熊手で大掃除をすることが大切である。 兒供

が泥だらけになつてをるのは、だん／＼に洗ふてやるでなく、一度に全然洗ふてやらねばなりませぬ。神が私し共を潔め給ふも亦その通りである。聖書に、「我らを愛し、その血を以て我らの罪を洗ひ潔め」(黙示録一〇五)又「其の子イエス・キリストの血、凡て罪より我らを潔む」(ヨハネ第一書一〇七)などあるは此の意味であります。

此等の事を前申したる老信者に語り聞せ、さて、あなたは過ぐる六十年間、キリスト信者としての経験により、初めてキリストに事へたる其日より今日までに、餘程聖潔に近づきましたかと尋ねると、其人は正直に答へて、一向然うは思はれませぬと申しました。そこで併し六十年の歲月はだん／＼潔めらるゝと云ふ説の、眞偽を驗すに充分の時日ではありませぬか。もし六十年かゝつても一向潔められた覚えがなければ、是は即ちだん／＼成長すると云ふ説の、眞實でないことを示すものでありませうかと申しますると、老人は成程と合點して、即ち進み出て聖潔を祈り求むることになりました。

同人は其の夜は願を果しませぬでしたが、翌晩もまるつて、此度は跪いて祈禱を始め、未だ五分も経つか、經たぬに忽ち踊りあがつて、兩手を擴げ、涙滴る顔に天の光を映しつゝ、「ア、

東の西より遠きが如く、今神は我が愆を全く我より遠ざけ給へり」(詩篇百三〇十二)と叫びました。爾來此の老人は小より大に至るまで、斷えずキリストに在る驚くべき恩恵を證する爲め、其の残年を過ごし、終に聖き神の御懷へとは凱旋致しました。

わたくしは又嘗て或人に向ひ、直ちに聖潔を、受くべきことを勧誘すると、其の人が申すには「其事ならば私しは、更生の時に既に之を得て居ます。神は私しを救ふ時、中途半派なことをせず、全き働きを成されました」と、かやうに答を致しました。そこで私しが申すには、「兄弟よ、實に神は全き働きをなされたに相違ない。神は貴君を更生する時、あなたの罪を半分だけ残し置くことなく、悉く皆永遠に赦し給ひました。しかのみならず神は聖靈をあなたの心に遣り、あなたが百萬圓の財産家の世嗣となり、又は知事になつたとの報知を受取るよりも尙ほ福なる、神の世嗣となり、教主イエスと偕に萬の物の世嗣とせられたと云ふ天來の音信を聞かせ給ひました。榮光は神に在れ。併し乍ら兄弟よ、あなたは其の更生によりて、凡ての短氣、憤怒その他之と似たやうな心の罪から救はれてをりますか。あなたは現に聖き生涯を送つてをると申しまするか」と、問ひつめますると其の人が言ふには、「否、其の點になると私は貴君と意見

が違ひます。私は現世で人が凡ての短氣や、又は憤怒から救はるゝものとは信じませぬ」と云ふ様なわけで、つまり前には更生の時直ぐに聖潔をも受けたと言っておきながら、今は決して然る惠を経験して居ないことを白狀する如き次第。或友人が「彼人は、藥を服むよりも、自分が病氣であることを否む」と申したる通り、實は眞に氣の毒な人物であることを發見致しました。

聖書と實驗とは人が更生りたる時直ちに聖潔を受けると云ふ證據を立てず、かへつて全くその反對のことを教へるものである。更生りたる人は、罪を赦され、神の家族に加へられたりとの證を授けられ、愛情の方向が一變する者である。併し乍ら久しからずして、その忍耐には何分か尙ほ短氣を混じ、親切には恚憾を混じ、柔和には忿怒を混じ、謙遜の中に高慢あり、イエスに忠義を盡くす心には、十字架を耻づる念が含まり、はたまた靈の果には肉の行が、大か小か加はつて居ることを見出すものでござります。〔此等は心の中のこと故、人には分らずとも自分はよく識つて、心苦しく覺えるものである。〕

さりながら此等すべての罪と汚穢は、聖潔を受ける時に悉く取除かるゝものである。此の潔き心は神が救に次いで第二に與へ給ふ御恵みであります。而して聖潔を受けるには二つの大切

なことがある。これは何かと云に第一、全き心よりの献身、第二、救を受ける時と同様、確實なる信仰を働かすこととあります。

人が唯だ更生つたばかりの時には、其の舊い罪が譬へば木を伐つた跡の株の如くに残つて居る。木は既に伐つて除けられたけれども、やゝもすれば其の株から新しい芽をふき出す恐れがあります。木の株を取除くに一番早くて效驗のある法は、其の下に爆裂彈をしかけて之を彈ね飛ばしてしまふことである。ちやうど其の如く神は聖靈の爆裂彈を箇々の更生りたる靈魂にしかけ、其のまとへる舊き罪を根から取除かせ給ひます。かくて後その人々は、眞に「舊きは去つて皆新しく作れり」(コリント後書五〇十七)と言ふことが出來ます。(爆裂彈と云ふ語は使徒行傳一章八節等にある、ギリシヤ語の能力と云ふ語から出たものであります。)(アレンゲル氏)

この「聖潔」の恩寵による自己の聖化は、なほ山室軍平氏の次ぎの敘述によりて、明白に證されてゐるのを見ました私は、猶更に其の「聖潔」を受くべき祈りを、殆んど日夜にさへけてをりました。

聖潔とは凡ての罪を其の心より取去られ、愛の靈を満たさるゝことである。

即ち聖潔とは、一方から言へば一切の罪を根こぎにして悉く其の心から取去らるゝことで、又他方から言へば、全き愛を満たさるゝことである。即ち愛なる神様の靈に満たさるゝことをいふのである。神様は愛である。基督の宗教は又神様を愛し人を愛する所の宗教である。而して潔められたる人は、全く己に死んで愛の靈に満たされたものとなるが故に、以來は唯もう年中毎日、明けても、暮れても、神様と人とを愛し、愛によつて考へ、愛によつて語り、愛によつて働き、愛によつて生き又死ぬる人となる者である。人が一旦此の境涯に入れば、最早疑も、惑も、功名心も、嫉妬心も、安逸を貪る心も、十字架を恥づる念慮も、偽善も、作爲も、世俗を愛するとも、身勝手も、淫猥な念も、皆無くなつて、後には、唯だ潔く、正しき、愛の靈のみが働き給ふこととなる。馬太傳五章四十八節に、「天の父の完全が如く爾曹も完全すべし」とは此の事である。加拉太書二章廿節に「最早我生けるに非ず基督我れに在て生るなり」とは此の事である。其他「全き救」といひ、「清き心」と云ひ、「全き愛」といひ、「靈に由て歩む」といひ、「靈に満さるゝ」などといふのは、皆此の有様をいふたるものである。基督が「婦を見て色情

を起す者は、心の中すでに姦淫したる也」との嚴重なる御戒も、潔められたる人には難なく之を守ることが出来。又パウロが「愛は律法を全うす」といふたる語も、聖潔を得たる人には、日毎に之を實驗することが出来るものである。(山室軍平氏)「實行的基督教」

更に、使徒パウロは云ふ。

『神の我らを招き給ひしは、汚穢を行はしめん爲にあらず、潔からしめん爲なり』——『神は我らを救ひ、聖なる召をもて召し給へり』

聖からしめんとて、聖なる召をもて招き給ふ救ひ、そこに、『聖めたまへ』と祈る自身のこと、ろに、私は何の矛盾も感じずに居りました。更に、

『召したる者を義とし、義としたる者には光榮を得させ給ふ』

『御前にて潔く瑕なからしめん爲に、世の創の前より我等をキリストの中に選び』

召して光榮を得しめ潔く瑕なからしめん爲に選び給ふ。この救ひによりて自己完成——聖化の願ひは、必ず充たさるべき期待を、私は信仰と共に深く抱いてをりました。

『されば愛する者よ、われら斯かる約束を得たれば、肉と靈との汚穢より全く己れを潔め神を畏れてその聖潔を成就すべし』

聖潔の完成を求めよ！

さうして自身の現在の苦境に對しては、次の聖句が最も切實に、私を勵ますのであります。

『——『わが子よ、主の懲戒を輕んずるなかれ。主に戒めらるゝとき倦むなかれ。そは主、その愛する者を懲らしめ、凡てその受け給ふ子を鞭うち給へばなり』と。爾らの忍ぶは懲戒の爲めなり。神は爾らを子のごとく待らひ給ふ。誰か父の懲らしめぬ子あらんや。すべての人の受くる懲戒、もし爾らに無くば、それは私生兒にして實の子にあらず。また我らの肉體の父は、我らを懲らしめし者なるに尙ほこれを敬へり。まして靈魂の父に服ひて生くることを爲ざらんや。そは肉體の父は暫くの間その心のまゝに懲らしむることを爲しが、靈魂の父は我を益するため、その聖潔に與らせんとてしめ給へばなり。凡ての懲戒、今は喜ばしと見え反つて悲しと見ゆ。されど後これに由りて練習する者に、義の平安なる果を結ばしむ。されば衰へたる手、弱りたる膝を強くし、足なへたる者の履み外すことなく、反つて醫やされんために爾ら

の足に直なる途を備へよ。力めて凡ての人と和ぎ、自ら潔からんことを求めよ。もし潔からずば主を見ること能はず』

神の鞭

わたくしは全く新しい自分に化成されなければならぬ。必ず全く化成されなければならぬ！

この要求は、今や、復た更に、私の本眞から自から發せられる、極めて鋭い聲である。「全く新しく」「全く」——こゝに此の要求の重心が在る。

故に、鍛へられるだけ鍛へられなければならぬ。根柢から全部を擧げつくして鍛へられなければならぬ。そこに、有てるものは盡く取り上げられなければならぬ。何も無い且つ中心から全く新しい赤裸々になつて、その力強い常に新鮮な自分を、主の御爲に、世に提供せよ。その爲には、現在に於て鍛へられかたが未だ確かに足りない。猶ほ強く、猶ほ強い鞭で、猶ほ常に、この舊い息の絶えつくすまで、鍛へに鍛へられなければならぬ。見よ、舊い自分が、未だ氣息を吐いてゐるではないか。

どうしても、最も厳しい一絲の緩るみをも苟くも容るさぬ、峻しい烈しい、心の血の滴るやう

な強い鞭の下に、此の心のすべてを供へて、全く新しい、主の爲のみの自分を、その鞭の下から生まれさせ、その生まれた自分を、主の御爲に、世に献ける。これが私としての眞實な路程なのだ。私として行くべき道は、この他には示されてゐない。

覺悟、強い覺悟をせよ。その心を強くせよ。

鍛錬の鞭を、正しく確かに受ける爲に、眞の自分を成すために、強い覺悟をせよ。

私には力が賦與されてゐる。この力によつて、鍛錬の鞭の下に、新しい自分を生むのだ。

火だ。この力は火だ。あたへられた火で灼き、主の鞭によつて鍛へられ、かくて、眞實の自分、本然の自分、使命に適ふ自分、主の御爲の自分が、化成されるのだ。

鍛錬の一鞭は、今も、すでに來てゐる。家族のことなどを、苟くも憂慮するな。

有てるものを、先づ盡く棄てなければならぬ。

決心、強い決心をせよ！

かくのごとくにして、主に従ひ得る自分に化成せられよ。

私は、昨夜、右のごとくにおもひ、今朝、更に自身の舊生涯を顧みた。

かへすくも私の舊生涯には、惨忍なほどに矛盾してゐる節々がある。この惨忍な矛盾を感じるときに、私は、自身の根柢から、「献身奉仕」の四字を、思はざるを得ない。この矛盾せる私の心的眞相は、主と私との他には誰も知らない。親も、兄弟姉妹も、妻も、誰も知らない。

あゝ主は、この僕の罪々を任はせ給ふ——。而して罪は除かれて赦され潔められ贖はれても、既に時間のうへに取り還しのつかぬ過去の矛盾が、いかにして調和せらるべきかを、私は、更に必ず學ばなければならぬ。そこに、私の新生涯は、あくまでも自分を第一着に棄て、かゝる生涯でなければならぬことを思ふ。然うして行くのでなくては、片時も生き得ない自分であるのを舊生涯の矛盾が迫るやうに今私に教へる。

祈りは行ひによつて完成せられる。之れを完全に言へば、行ひそのものが既に祈りである。

祈りの生涯とは、主の御前に身を伏してゐることの多い生涯をいふのではない。主の聖旨に適ふ行ひによつて主に奉仕する、生々たる、潑刺たる生涯をいふのである。献身奉仕の生涯こそ、祈りの生涯である。かくて、一に祈れ！ 二に祈れ！ 三に祈れ！ 邁進而して邁進、祈りと行ひと一致するときに、即ち、祈禱即行爲の境遇に於て、自分は其の一步づゝに眞に若實に

主に近づき得るのである。

後半生のすべてを献ぐる祈り——其の行ひを全うせしめよ。その爲に私は猶ほ十分に完全に鍛へられなければならぬ。その爲に全く新しい自分が生まれなければならぬ。舊生涯は、全く新しい自分の生誕の爲に、費されたのであつた。罪は憎むべしと雖も、同時に、私をかくあらしめ給ふ主の不思議なる愛こそ感謝し奉るべし。

鍛へられて潔かれ！ 苦練の鞭を感謝せよ！ 神は聖潔に與からしむべく其の子を懲戒し、子は潔からずば父を見得ず。

ここに私は内外の逆境を感謝しつゝ、同時にイエスの十字架の尊き苦惱を仰いでをりました。

讚	謝
穢	心

神は、その獨子キリストの聖靈を、時所を選ばず、生み給ふ。即ち、イエスの聖靈は、時所を選ばず、生まれ給ふ。どこの誰れの衷に、何時にても。

然るに、あゝ然るに、いかに頑き、いかに鈍き、いかに力なき、いかに脆き、

いかに邪まな私の性情であらう。父なる神よ、爾こそ誰よりも最も良く之れを知り給ふ。人

類の有する一切の悪性を、私は衷に盡く具へてゐる。父なる神よ、然り、私は斯くの如き悪性の者でございませう。心の癱瘓、心の癩病、まして心の瞽なる、また聾ひたる如きは、寧ろ私として甚だ輕微な疾でございませう。足は跛へ、手は枯れ、舌は啞、瞽、聾、癩に穢れ、癱瘓に疾む。まことに羸々として、光の下を行くこと能はず、暗を選びて漸く蠢き、忍び匍ひ行くものは、私の心でございませう。事實、事實、父なる神よ、爾こそ誰よりも、最も良く此の事實を知り給ふ。

かくも穢れはてたる自分が、爾を尙ほ、父と呼びまつり得ますること、このキリストの限りなき神子の恩寵に、全心の感謝を献けまつります。父よ、まことに衷心止みがたき感謝をさしけ奉ります。

父よ、願はくは、肉の意識によることなく、まことに誠に靈の意識によりてのみ生くるものと爲し給へ。父よ、爾に成し能はざるところなし。爾は此の切なき慨きと切なる祈願を知り給ふ。父よ、大いなる者に成し給へとは祈りまつらず、願はくは、父の聖旨に適ふ者、主キリストに忠實なる者たらしめ給へ。願はくは、主キリストに従ひ得る者たらしめ給へとのみ祈りま

つる。爾は此の祈の心を知り給ふ。この祈を聞き給へ！

父よ、私に自分の頑き、鈍き、力なき、脆き、邪なることを、知らしめ給ひしことを限りなく感謝しまつる。これによりまして、私は猶ほキリストの至深の愛を濃まかに受けまつり、その靈能にたよりまつり、主によりてのみ、あゝ主によりてのみ息し得る者なることを、更に切に更に心にしめて知り得ることでございます。まことに誠に此の賤劣貪汚な者は、わづかに祈によりてのみ、主のみまへに出で得るのでございまして、その無力、その無智、その無爲、たゞ夫れ主の愛のもとに、主の御力によりてのみ立たしめられることでございます。父よ、かくて爾は、「キリストの御爲のみの者たらしめ給へ」と祈りまつりし私に、かしこくも應へ給ひて、私の心の頑く鈍く力なく脆く邪なることを、知らしめ給ひ、以て私をして、ますます主の愛の濃まかなるを渴仰せしめ給ふ。父よ、感謝しまつる、願はくは、この感謝を聞き給はんことを。あゝ我が此の心、鈍し、頑し、力なし、脆し、邪まなれども、主は愛なり、主は愛し給へば、何をかまた徒づらに慥き嘆かん。父なる神は讀めまつるべきかな。御榮は主にあり。主をあたへ賜ひし父なる神は讀めまつるべきかな。

幼
の 衷
火

父よ、この生まれしばかりしの幼児を育て給へ。キリスト・イエスによりて生まれし幼児なれば、キリスト・イエスによりてのみ育てらる。

この血を潔からしめ、この肉を強からしめ給へ。眞直ぐに歩み進ましめ給へ。

この血をキリストの血にて潔く、この肉をキリストの肉によりて強く、キリストの力によりて歩み進ましめ給へ。父よ、この他に、この幼児の、生ひ立つべき途はなし。願はくはキリスト

の聖靈の愛の乳を、そゝぎ給へ。

父よ、健かに全く育ち、主のみまへに立ち得る一人たらしめ給へ。この爲のみに生まれし者なれば、この爲のみに生ひ立たしめ給へ。

幼児の呱呱の聲に聞き給へ。父を呼びまつる。願はくは聖靈の乳を、そゝぎ給へ。爾

の大能をもて、幼児のうへに掩ひ、主によりて生まれし幼児の約束を成就せしめ給へ。父よ、

こは幼児の衷なる願ひなり、父よ聞き給へ。御能によりて、その約束を成就せしめ給へ！

父よ、忠なる者たらしめ給へ。主のみまへに忠なる者たらしめ給へ。主の血を啜りて忠な

る者となり、主のみために勵む者たらしめ給へ。然らざる衷のこゝろを殺し給へ。幼兒の衷に火燃ゆ。この火によりて不忠なる諸々の遺れるものを燬き盡くさしめ給へ。この火を不斷に永へに燃えしめ給へ。主、この火と偕に在らしめ給へ。幼兒は眼ひらく、衷の火の燃ゆるまゝに叫ばしめ給へ。主の福音を、宣べ傳へしめ給へ。父よ、幼兒の衷に、この火を投入れ給ひし聖旨を成さしめ給へ。この火を、天上に獻けまつらん肉の死の日に、父よ、誠に願はくは、主のみために、この火の炎を既に大ならしめ給へ。

父よ、爾は知り給ふ、その約束を全からしめ給へ。主イエス・キリストの聖名によりて祈りま

つる。
祈りながら、それを時々書きのこしながら、その自身の内的現實を、わたくしは臚物を見るやうに觀てをりました。

忍べ！ 聖められんが爲に忍べ！ 神は救のために永く忍び給ひ、イエスは生涯を通じて十字架の人であつた。使徒たちもすべて忍苦の人であつた。忍べ！ 艱難それは基督者が世にありて負ふべき特權ではないか。

また實に、「聖書」を開けば、隨所に滲める尊き忍苦の魂が、躍然と、潑刺と、讀む私の衷なる魂をつかみ、撓まざる新しき生氣をそゝぎ入れ、鞭うち、または慰さめ、さうして復た更に幾度か奮ひ立たせるのでありました。然し、そこに猶ほ起き上り得る自分の氣力が微弱なりとも餘されてゐました間は、その氣力によつて尙ほ忍び得る、忍苦の餘地が、自身の内に殘續してをりました。さうして、その殘續しつつある氣力すらも最後に失はれ磨滅するやうに失はれます時に、私はたゞ内外の艱苦の下に喘ぎ、その苦痛を神の鍛へ給ふ恩寵として感謝すべき餘裕の無き自分を觀ました。こゝに凡ての事を感謝すべき信仰を強ひて催起せしめんとする努力。その自から作爲する感謝によりて自身を慰さめんとする欲求。更に、その感謝によつて自身の信仰の向上を自認的に裏書せんとする試みなど、而も、私自身の生來の弱き氣力を以てしては遂に忍び得ざる艱難の下に、これらの自身の努力、欲求、試みなどのすべてが、盡く何の價値も無く崩され、その最後に忍ぶべき餘地なきまでに自分の氣力が失はれます時、わたくしは、こゝにも

信仰的意識の時々に歎む自分を餘儀なく見ました。

イエスに依りて忍べ！ 自分は斯くも弱い。 然し、イエスは強く實在し給ふ。 イエスに依りて忍べ！ イエスの愛よにりて忍べ！ イエスの十字架を仰け！

然し、然く努むべき氣力さへも枯れつくしてゐます自身には、「聖書」のうちの忍苦に充つるイエスと使徒たちの事蹟も言も、遂に私自身とは交渉なき空文であることを、更に苦るしく見ました。 同時に、そこに、ますます醜惡な自分——少しも聖められざる自分の悪性を、顔をそむけても猶ほ餘儀なく見ました。

悪性、それを如實に書きますことは手の動き得ぬ羞耻と共に、書く苦痛に忍び得ませぬ。 たゞ『悪性』の二字によつて、この間の自身の消息を敢て葬りたく思ひます。 この卑劣さを甘んじて受けたく思ひます。

『人より進み出づるものこそ、それこそ人を穢し居るなれ。 そは内部より——人の心の中心より、悪念進み出づればなり。 淫行、竊盜、殺人、姦淫、貪慾、邪曲、欺騙、好色、惡目、誹謗、傲慢、愚痴、すべて之等の悪事は、内部より進み出で、人を穢し居るなり』

イエスの言は、切實に、私の内部を發掘し、その穢れを畫の光の下に並べ、眼の前に示されるごとく刺戟を、私に刻みつけ、然も、そこに、『聖めたまへ』との祈の如きは、少しの應驗も無き内部の事實を自身に見るのであります。 自身の屍骸を抱いて泣くごとき時が、幾度か私を襲ひました。

『爾ら聞けり。『爾、姦淫する勿れ』と言はれし事を。 されど、我れ爾らに言ふ。 凡そ彼女を貪らんとて、女を眺め居る彼れは、既に彼れの心に於て、彼女を姦せしなり』

イエスの烈しき言。 然も、聖められし者は、婦人を見るも性的欲求を起すこと無しと、山室軍平氏が其の著書の中に明記してゐられるのを見ました時に、私は其の「聖潔」の恩寵を想ひ、殆んど全心をあけて、その聖者らしき境涯を望みました。 然し、事實に於て、私自身には遂に聖められざる自身の内部の穢れを、凡そ一年の祈の後に、ますます深く省みさせられ、かくて、

「聖書」は、いかに聖く卓越せる書なりとはいへ、それは自身の本性に完全には相應せざる、断片的には自身に接觸し得ても、遂に自身とは全的に一つになり得ざる特別の書であり、豫定せ

られたる特に選ばれし人に於てのみ完全に體驗せられ得る書ではないか？

この疑惑が、漸く私に萌し初めてをりました。イエスの十字架の贖罪により救はれしと自覺せし最初より、凡そ一年半の後に、「聖書」は、かく私に初めて疑惑の書になり、その疑惑は自身に少しも意識せざる、求めざる、然も反つて意識すべからずとせし疑惑なのでありました。

動搖と、不安と、薄弱と、疑惑と、かうして自分は、どうなるのか？ イエスの十字架の救ひをたゞ信仰することは易い。然し、その信仰を「聖書」に従つて體現することは、私には難かしい。然も、「聖書」のキリスト教を離れて、純真なキリストチャンには最も當然に成り得ない。

正當に「聖書」の全體を讀む時に、この自分はキリストチャンたり得ないのではないか？

自力の信仰と祈りとに疲れつくす爲めに、今までの一年半が費されてゐたやうに、遂に感じられ、さうして氣力の疲れつくせし結果は、たゞ自身と一つに成り得ざる「聖書」——イエスの『福音』に對する疑惑のみが、遂に餘儀なく内に萌してをりました。

愛し得ず、信仰は時々感激を失ひ、祈は充たされず、自身の内部は聖められず、これらの自身のすべてが一聖書一のキリスト教と背反する自分であることを、内に觀ます時に、

遂に救はれがたき自身ではないか？

との疑惑をも、やがて私は極めて潜かに隠しながら感じてをりました。

これらの疑惑をこそ、惡魔的誘惑として、屢々、激しく退けてをりました。然し、自身の内部の欺きがたき如上の惡魔的な事實こそ、反つて疑惑を正しいものとして證徴するものであるのを、何ともし難いのでありました。

自分が、他ならぬ自分が、疑惑の正しさを證明してゐる、この自分の醜惡な内部の事實！ 惡魔的誘惑？ その惡魔は即ちこの自分自身ではないか。

疲れのうちに斯く感じ、こゝに疑惑は疑惑に非ずして、かへつて「聖書」と自身とに關する正しき理解のやうに思はれ初めました。

この時に、嘗て讀みました『親鸞』の『愚禿悲歎述懷』の數節が、胸を刺すごとく鋭く思ひ出されまして、「眞宗聖典」を私は直ぐに披ひらきました。

愚禿悲歎述懷

淨土眞宗に歸すれども

眞實の心はありがたし
 虚假不實こけふじつのわが身にて
 清淨の心もさらになし

既に信じて、自身には、眞實の心も、清淨の心も、絶無であると悲歎する親鸞！

こゝに大きな愕きが私を動かしました。信仰そこに魂を洗はるべき靈的更生と共に、必然に成さるべき聖潔の恩寵に浴すべきことを「聖書」によつて最初より確信してをりました私は、その確信の既に崩されつゝある疑惑に沈み、この親鸞の悲歎に接しまして、こゝに初めて自身の現在に最も近き人を、親鸞に圖らずも見たのであります。然し、

それならば親鸞の信仰は何處にあるのか？ あくまでも自身の穢れ深き宿業しゅくごうを悲歎し、西方淨土への未來往生の救ひを信じるのか？ その現在生活と交渉の無い信仰、厭離穢土・欣求淨土の信仰が、『如來より賜はりたる信心』なのか？

外儀ひぎのすがたはひとごとくに
 賢善精進けんぜん現げんぜしむ

貪瞋邪偽こんしんじあおほきゆへ

奸詐けんさも、はし身にみてり

悪性あくせいさらにやめがたし

こゝろは蛇蝎じやくけつのごとくなり

修善しゆぜんも雜毒ざうどくなるゆへに

虚假こけの行ぎやうとぞなづけたる

——『悪性さらにやめがたし』との歎き、この述懐のすべて、かくも悲痛に自身を懺悔せし親鸞と、すでに信仰により聖靈によりて自身は聖められしとするクリスチャンと、どちらが此の自分の現在と一つに感じられるか？

『虚假不實』『貪瞋邪偽奸詐』『悪性』『蛇蝎のこゝろ』

それらのすべては端的に嫌ひ忌まれ、「信仰と聖潔」これこそ猶ほ端的に望みながら、然も切に望まれる崇き美しき後者は、たゞ仰ぎ得て登り得ぬ天上の幻象の如く、忌みて唾棄する前者こそ反つて自身の歎きがたき現實であることを、わたくしは其の實感の苦痛と共に眞に餘儀なく

自身の内に熟視しました。

『我れ潔ければ爾らも潔くすべし』と、イエスは言ひ給ふ。

イエスカ、親鸞か、キリスト教か、眞宗か。教義の差別が何か。神學、宗乘、それに何の價値があるのか。見よ、自分は一人しかるないではないか。一人！一人が歩む上に、何のキリスト教、何の眞宗、何の差別を意識する必要があるのか？因襲と模倣との一切を棄て、新しく、全く新しく自身の現實上にイエスを見、親鸞を見よ！『今』の實感に立て！

いはゆる『キリスト教』の概念的信仰の殻を碎き、いはゆる『眞宗』に對する概念的批判の障壁を崩し、ありのまゝなる自身、赤裸なる自身を省みます時に、それは遂に『親鸞』の悲歎述懐の中にこそ、自身の現在のすがたを思ひ知らされるのでありました。さうして『愚禿悲歎述懐』を繰りかへして讀んでをりますうちに、その『親鸞』の悲歎の痛烈なるに打たれまして想はず涙をこぼしました。同時に、母に『親鸞』の存在を教へられまして七年の後に、初めて『愚禿悲歎述懐』によりて親鸞の外皮の一端に、わづかに觸れたかのやうに感じられました。なほそれを讀みつづけまして、

無慚無愧のこの身にて

まことのこゝろはなければども

彌陀の廻向の御名なれば

功德は十方にみちたまふ

小慈小悲もなき身にて

有情利益はおもふまじ

如來の願船いまさずば

苦海をいかでかわたるべき

蛇蝎奸詐のこゝろにて

自力修善はかなふまじ

如來の廻向をたのまでは

無慚無愧にてはてぞせん

と、記されてありますのを讀むできますうちに、闇より光へ、靜かに流れるやうに導かれてく

るごとき、ほの／＼とした和いだ感じが萌してくるのでありました。

『彌陀』『如來』『廻向』これらの佛語ぶつごに對する在來の因襲的な固定した概念からも、自分は先づ離れなければならぬ。

扮	装
を	
脱	け

佛語ぶつごに對して、自身の先入主となつてゐます固定的概念より離れんことを心がけつゝ、「教行信證」の「信卷」を、私は再び讀み初めました。そのうちに

『親鸞』の『愚禿悲歎述懐』は、善導大師の『觀經正宗分善義』に依りて、親鸞自身の内省を述べしものであることを初めて知りました。

『外そとに賢善精進の相を現することを得ざれ。内に虚假こげを懐いだけばなり』

これを讀みました時、自身の信仰また聖潔などに自負してをりました自分の偽善的な面皮が、まざ／＼と剝ぎとられるごとき刺戟を受け、そこに自身の信者らしき従前の扮装的努力、その身の内外の全部を土に投げつけ踏みじり、唾を吐きかけたい端的な自己嫌忌に打たれました。

偽善者！ 内に虚假を懐きながら、白々しく賢善精進のすがたを現してゐる。偽善者！ その名は他ならぬ山中峯太郎ではないか。賢善といひ、精進といひ、そのとほりの自分ではない

か。何かと賢さうに好んで概念の弄戯に走り、聖めらるべき善人の顔を現さんとし、然くあらんとして精進し努力する。然も、見よ、内に何を有つてゐるか？ イエスに救はれキリスト我に在りて生けりと信じながら、その信仰の動搖と間歇、そこに隠現するイエスの幻影、自身の醜悪の深さ、すべてが眞に根抵の無い虚假でなくて何か！

こゝに右の善導大師による親鸞の短かき一文が生きて私を強迫し、鋭く喝破されて冷水を浴びるごとき戦慄を衷心に感じました。なほ續いて、

『貪嗔邪偽、奸詐百端にして、悪性侵め難し。事蛇蝎に同じ。三業を起すと雖も、名づけずて雑毒の善となす。また虚假の行と名づく。眞實の行と名づけざるなり。若し此くの如きの安心起行を成さば、たとひ身心を苦勵して、日夜十二時、急に走め急に作して、頭燃を灸ふが如くすれども、すべて雑毒の善と名づく。此の雑毒の行を廻らして、彼の佛の淨土に生まれんと欲するは、これ必ず不可なり』

自身の現在の眞相を、深く抉り出して、『見よ』と指し示されるごとく痛切な是等の文字を、息のつまるばかりの壓迫を感じながら私は見ました。

六、何れも、善く行ふ者は、天に昇るに止む、聖なる人々の群を現す。然るも、見よ、世に何れも、善く行ふ者は、天に昇るに止む、聖なる人々の群を現す。然るも、見よ、世に何れも、善く行ふ者は、天に昇るに止む、聖なる人々の群を現す。

七、何れも、善く行ふ者は、天に昇るに止む、聖なる人々の群を現す。然るも、見よ、世に何れも、善く行ふ者は、天に昇るに止む、聖なる人々の群を現す。然るも、見よ、世に何れも、善く行ふ者は、天に昇るに止む、聖なる人々の群を現す。

第七章

爾らの天の父の完全なるが如く
爾らも完全なる者たるべし
イニス
いづれの行もおよびがたき身なれば
とても地獄は一定すみかぞかし
關 緊

安心起行を求め、その爲に、日夜十二時、殆ど常に、急走し急作して、それは眞に頭の燃えてゐるのを炙^ほふが如くに、然も自身の悪性は侵^かめ難く、愛、善行、信仰、祈、聖潔、いづれも自身が生來の毒を雜^まへて、苦勵し來りし心身は遂に立ち得ぬほどに疲れきつてゐるではないか！
こゝに暫く私は傷つけられ蛇のやうに、のたうち廻つてをりました。自身の上に成すべき一策も無き自分を觀ました。

それならば親鸞の『信心』とは？

親鸞の信條は親鸞に問へ！

不立文
字の信

經論^{けいろん}の拔萃と其の解説のごとき外觀を成してゐるかのやうに感じられました
「教行信證」よりも、親鸞の信心は親鸞自身の言に聞くべく、さうして、これに恰かも答へられます言を「歎異鈔」のうちに私は見ました。

『各^{おの}、十餘箇國のさかひをこえて、身命をかへりみずして、たづねきたらしめたまふ御こゝろざし、ひとへに往生極樂のみちを、とひきかんが爲なり。しかるに、念佛よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をも、しりたるらんと、こゝろにくい、おほしめし、おはしましては

扮装を脱げ
不立文字の信
念佛の驚異
寫れる樹

るるのふぶき... 長、先、自身... 露光量... 重複撮影... 念佛の驚異... 寫れる樹

不立文字の信

念佛の驚異... 寫れる樹... 露光量... 重複撮影... 念佛の驚異... 寫れる樹

んべらんには、おほきなるあやまりなり。もし、しからは、南都北嶺にも、ゆゑしきがくせう學生たち、おほくおほ在せられて、さふらふなれば、かのひとびとにも、あひたてまつりて、往生の要よくくきかるべきなり。親鸞におきては、たゞ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおほせをかうふりて、信するほかに別に仔細なきなり。念佛は、まことに淨土にむまるゝたねにてや、はんべらん。また地獄におつる業にてや、はんべらん。總じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされまいらせて、念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。そのゆへは、自餘の行をはけみて、佛になるべかりける身が、念佛をまうして、地獄におちてさふらはゞこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ。いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地極は一定まことすみかぞかし。彌陀の本願、まことにおはしまさば、釋尊の説教、虚言なるべからず。佛説まことにおはしまさば、善導の御釋、虚言したまふべからず。善導の御釋まことならば、法然のおほせ、そらごとならんや。法然のおほせまことならば、親鸞がまうすむね、またもて、むなしかるべからずさふらふ歟。詮するところ、愚身が信心におきては、かくのごとし。このうへは、念佛をとりて信じたてまつらんとも、また、

すてんとも、面々の御はからひなりと。云々』

あゝこれが親鸞の答へなのか。

眞に素朴な、爽かな、さうして冷たい、あだかも白木を見るやうな親鸞が私に感じられ、親みは薄く、『たゞ念佛して救はれよと法然上人に教へられて私は信するばかりである。淨土に生れるか、地獄に墮ちるかも、すべて知らない。彌陀——釋尊——善導——法然——親鸞、この傳統のもとに私の言ふことも虚うそではないであらう。この他に私の信仰は無い。このうへは信するも信じないも、あなた方のおこゝろ次第である』として、自身獨りの信仰のみを超越的に、簡潔に、言ひ斷り、對者には殆ど無關心のごとき親鸞の言は、とりつきやうもなき寂しさを、私に感じさせました。

然し、かくも簡潔に、獨自的に、たゞ斷言する親鸞の内面の透徹さ、純一さ、自由さ、などが、その言ばの裡に明かに直感されますのと同時に、それらの根柢を成せる『信心』の奪ふべからざる毅さ、大きさ、深さが、靜かに察しられるのでありました。

たゞ念佛して救はれる。私の信仰としては、この他にはない。たゞこの一語、これが親鸞の

信仰であると言ふ。餘りに簡易な餘りに單純な、然も、とりつきやうが何處にもない至難な、懸崖を仰ぐやうな氣がする。學問は學者たちに聞きなさいと言ふ。然も、念佛は救はれる道か、亡びの道か、それすらも知らぬといふ。いかに透明な歸依な態度であらう！

信仰に於て澄み徹つてゐるやうな親鸞を私は見ました。同時に、その純一な、白木の如き、簡易な信仰、それだけに信すべく至難な、むしろ信じやうも無きそこに、禪の『不立文字』『教外別傳』などの語が想ひ出されました。

母は『易い御信心。易い御信心』と言つてゐた。何が易いのか？

不立文字。いひ捨てしその言の葉の外なれば筆にも跡をとゞめざりけり

教外別傳。荒磯の波も得よせぬ高岩に牡蠣もつくべき法ならばこそ

『傘松道詠』のうちの二首が圖らず思ひ出されました。さうして、親鸞と自分の間に、超えがたき大きな離隔が、『信心』のうへに感じられました。なほ再三くりかへしまして「歎異鈔」の右の言を読むでゐますうちに親鸞との隔たりが、いよ／＼深く意識せられ、たゞ『いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地極は一定すみかぞかし』この一語のみが、私に限りなき親し

さを懐かせるのでありました。

刺し殺すばかりの此の毒語。この『親鸞』の自覺、こゝにあくまでも堅く握手し得るやうな親鸞が、信仰に於ては遙かに離れてゐる。さうして、ただ念佛して救はれる。それすらも知らずと言ふ親鸞、その念佛の意義は？

念	佛
の	
驚	異

『念佛』といふ語に對する私自身の従前の概念、それは器械的に唇を動かして稱へます習俗的な念佛を想ふことなく、親鸞自身より念佛の意義を聞くべく、そこに同じく「歎異鈔」によりて、次ぎの言に接するのでありました。

『念佛者は無碍の一道なり。そのいはれ、いかんとなれば、信心の行者には、天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし。罪惡も、業報も、感ずることあたはず、諸善もおよぶことなきゆへに無碍の一道なりと。云々』

『念佛は行者のために非行非善なり。わがはからひにて行するにあらざれば、非行といふ。わがはからひにてつくる善にもあらざれば、非善といふ。ひとへに他力にして、自力をはなれ

たるゆへに、非行非善なりと。云々』

『念佛には、無義をもて義とす、不可稱、不可説、不可思議のゆへに』

こゝに従前の私自身の念佛に對する器械的な概念は、すぐに崩されました。それと同時に、『念佛者は無碍の一道なり』との堂々たる超越的權威に充てる強き言が、私を愕かしました。

人生を宿業に歸して、弱き諦らめに墮ちてゐるかのやうに想はれる親鸞が、かくも強く、自由に、獨り歩むかの如き宣言を敢てする。信心の行者には、天神地祇も敬伏し、魔界外道も障礙することなしと言ふ。然も、罪惡も、業報も感ずること能はずと言ふ。更に諸善も及ぶことなき故にと言ふ。この人間の尊貴な高擧、これが、いづれの行も及び難き身なれば、とても地極は一定すみかぞかしと底下に沈める自身を告白し、然も、宿業しゆくごうに任せよとまで言ひし同じ親鸞の言なのか。宿業の繫縛と無碍の自由。地極一定の沈みと獨歩的な高擧。この相反せる一面より他面へ躍進し超越する同じ一つの魂、そこに意識せらるゝ、『念佛』は、『非行非善』と言ひ、『不可稱、不可説、不可思議と』言ふ。

こゝに『念佛』は遂に直感すべき一つの生命であり、なほ禪と同じく冷煖自知すべき實感の上より初めて體得すべき、一つの實在でありますことが、たゞ是だけが親鸞の言を私に解しまして然く察しられるのであります。

いはゆる『念佛』それは唇のさきのみ、たゞ稱ふる悲調を帯びた消極的な器械的な無意味な一種の發音ではなく、そこに至深の生命感を内在的に含むでゐるらしい推察が、親鸞の言の斷片によつて、そゞろに私を動かし初めました。然し、親鸞は佛教の多くの宗派の中の一つであります『淨土眞宗』と言ふ一派の開祖として、たゞ傳統的信者より崇拜せらるゝ一僧侶であるとの先入主的な概念が、私の衷心より遂に離れ得ず、それは日本佛教の正宗を開きしに過ぎざる輪廓の小さな人物として眺められるのであります。

その親鸞に比するまでもなきイエス・キリストの救世主としての神性、その尊貴、その權威、その高潔、その愛、その地上生涯に現されし神の成肉の顯現、十字架の死、その復活、その榮光、人類の上に光被しつゝある永遠的な愛能を仰ぎます時に、神として、人として、神の獨子なるイエス！ かく意識するさへ魂は揺り動かされ、そこに耐へ得ぬほどの感激に打たれるのであります。

腐	れ
る	樹

『父よ！ 爾の我れに於て在り、我れの爾に於て在るが如く正に斯く、彼等（信者）も亦、一同、一つならんことを。これ彼等もまた我等（神とイエス）に於て在り、かつ爾の我れを派遣せしことを、世に信ぜしめんとてなり。爾の我れに與へたるところの榮を、我れもまた彼等に與へたり。これ我等一なるが如く、正に斯く彼等も一つならんが爲なり。我れは彼等に於て在り。爾は我れに於て在り。これ彼等の一つに完成せられんが爲なり』

イエスの祈。神とイエスと信者との一つならんことを祈り給ひしイエスに於て、人間は生くべき路を示される。人生はこゝに尊き聖き意義と價値とを發見し、人はイエスに救はれてイエスに行きイエスと一致しイエスを現す。人間のすべての問題は、こゝに解決せられ、こゝに開拓される。使徒パウロは言ふ『信仰によりてキリストを爾らの心に住まはせ』『爾らの中に在すキリスト』『キリストにある一人』と、然も、『我れキリストと共に十字架につけられたり。もはや我れ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生くるなり』と言ふ。『我れらはキリスト

の心を有てり』『爾らキリスト・イエスの心を心とせよ』と自身とキリストとの心的一致を語りて他にも勸告し、『人もしキリストに在らば新たに造られたる者なり』と新生の福音を説く。イエスとの一致。信仰によるイエスの内在。然り、イエスは私の内に在り給ふ。わが魂はイエスの十字架を立てし靈的ゴルゴダの丘である。内を省みればイエスは我が衷に住み給ふ。然も、更に見よ、この信仰は間歇し、イエスの内在的意識は、幻の如く時々消え、なほ然も、イエス・キリストを體驗すべく、そこに、自分は依然として舊き自分を觀る。餘儀なくも觀る。イエスの十字架の救ひを信ずるは易かつた。更にイエスとの一致を感受することも、既に私の内に欺きがたきイエスの實在を時々尊くも感じる。然し、それは概念の變化であつたのに過ぎないのでないか？ 事實に於てイエス・キリストを體驗すべく、見よ自分は何處にイエスと一致してゐるのか。心のみの信仰に安んじ、そこに止まり妥協し、身に體驗するところ無き、むしろ不可能な、即ちイエスと離れてゐる自分が、それのみにて『信仰』の名によつて満足し得るものならば、これこそ自分は『偽者』のクリスチャンでなくて何であらう。

『——『我れ彼れ（イエス）を知る』と言ひて其の誠命を守らぬ者は、偽者にして眞理その

衷になし。その御言を守る者は、誠に神の愛その衷に全うせらる。之によりて我れら彼れに在ることを悟る。彼れに居ると言ふ者は、彼れの歩み給ひしごとく自ら歩むべきなり』

使徒ヨハネは偽者の信仰を道破してゐるではないか。イエスの如く歩み得ざる、イエスを身に體驗し得ざる者が、何の故を以てイエスを知つてゐると言ひ得るのか。

『凡そ我がもとに來たり、わが言を聞いて、其等を爲しをる彼は、その誰に似たるかを、我れ爾らに示さん。土を掘り、深く下り、基礎を岩の上に据えて、家を建て居る人に似たり。さて洪水おこりて、激浪かの家を衝きたれども、これを揺がすことすら叶はざりき。これその家の良く建てられしが故なり。されど聞いて爲さざりし彼れは、基礎無く、地の上に家を建てし人に似たり。かくて激流その家を衝きければ、忽ち倒れぬ。さる程に、かの家の崩壊や大いなりき』

イエスの言。まことにこの言のやうに崩壊の大いなる現在の自分でないか。然も見よ、『聞きて爲さざりし』自分ではなかつたと思ふ。ひたすらに信じたしと願ひつゝも、自身の信仰は渾からず決定せず相續し得ず、その爲に祈れども遂に祈り得ざるまでに崩れ、聖められんことを

全心に願ひながらも悪性は殆ど不斷に跳梁し、誠命の愛は少しも衷心に有り得ず、すべてが餘儀なき此の自分は『聞きて爲さざりし』故意の反逆を敢てしたのではなかつたと思ふ。否、イエスの言、使徒たちの言を聞いて爲すべく進み、祈り、苦しみ、爲さんとして、遂に爲し得ぬ自分を、眞に餘儀なくも見てゐるのである。こゝに遂に崩壊してゐる。親鸞は言ふ『いづれの行もおよびがたき身なば、とても地獄は一定すみかぞかし』と。この言のうちに、餘儀なくも自分を見なければならぬ私にとつて、イエスよ。あなたの生の垂訓は、わたくしに餘りに強く、烈しく、鋭きにすぎ、聞けども爲し得ざる私は、遂にイエスを體驗し得ず、イエスと餘儀なくも離れてゐる自分は、イエスに對する純眞の信者たり得ざる本質を自身に見る。

『凡そ我れに』主よ！ 主よ！』と言ひをる彼れ、必ずしも天國に入らじ。されど天に在るわが父の意を爲し居る彼れのみなるべし。かの日に、多數の者、我に言はん。主よ！ 主よ！ 爾の名にて我ら預言せしに非ずや。爾の名にて我ら鬼を投げ出しに非ずや。爾の名にて我ら多數の奇蹟を爲しに非ずや。而も、その時我れ彼等に宣言せん。我れ未だ曾て爾らを識らざりき。爾ら不法を働き居る者、我より遠ざかれ。故に凡そ誰にても、我が之等の言を聞

きて、其等を爲し居る彼れば、誰か其の家を岩の上に建てし賢き男に擬へん。——』
イエスの垂訓を、前の言につゞき私は逆に讀むで行きました。

主よ、主よと曰ふものが、盡く天國に入るのではない。たゞ天國に入る者は天父の旨に従ふ者のみと宣言し給ひしイエスに聞け。岩の上に建てし如き確固たる體驗なく、即ちイエスに従はずして救はれんとする偽物の信仰、それは『主よ！ 主よ！』と呼ぶのみなる信仰は、即ちイエスより『未だ曾て爾らを識らず』と宣告せられ『我れより遠ざかれ』と斥けらるゝ者ではないか。イエスを身に現せ。使徒パウロの如くに『イエスの生けることを我等の身に現れしむる』イエスの體驗者にして、初めて其の信仰は體得せられ眞實となり得るのではないか。然らざる者は『我より遠ざかれ』實にイエスより遠ざけられる私自身ではないか。神として、人として、神の獨子として、恩寵と眞理に充ち、聖く、崇く、純に、渴仰せらるゝイエス！ 然し、イエスを體驗すべく、遠ざけらるゝの餘儀なき私自身は、どこに眞のキリスト教信者たり得る立點があるのか？

あらゆる一切を捨つべく遺書して吉野山に奔りし前の自分、その時に教へられし『捨てよ』と

のイエスの明晰な聖訓。 然も捨て得ずして遂に躓き、おめくくと山を出で來りし時の前後の自分が、そのまゝ想ひ出されました。

信仰、その體現、いづれも自分には不可能な自身を觀る。 かうして最後まで救はれがたき自分ではないのか？

『爾ら狭き門を通じて入れ。 され滅亡に導く門は大きく、道は廣し。 而して、之を通じて入る彼れら多し。 され生命に導く門は狭く、道は細し。 而して、之を見出だす彼れら少し。 爾ら僞豫言者を警戒せよ。 彼ら羊の着物に於て、爾らに近よれども、内部は暴き狼ほどの者なり。 彼等の果よりして、爾ら明らかに彼等を識るべし。 薊より葡萄を、或ひは茨より無花果を集めんや。 斯くの如く凡そ善き樹は良き果を結ぶ。 されど腐れる樹は悪しき果を結ぶ。 善き樹は悪しき果を生ずること能はず。 なほまた腐れる樹は良き果を結ばざるなり。 凡そ良き果を結ばざる樹は、伐り放たれて火に投げ入れらる。 故に爾ら彼等の果よりして、明かに彼等を識るべし。 善き人は善き寶盒より善き物を投げ出だし、悪き人は悪しき寶盒より、悪しき物を投げ出す。 是は心に溢るゝ所より口に語り出せばなり。 凡そ我に『主よ！ 主よ！』と

言ひをる彼れ、必ずしも天國に入らじ。――」

良き果を結ばざる樹、腐れる樹は、伐り放たれて火に投入れるとイエスは言ひ給ふ。この峻厳な審判の前に、私が遂に立ち得るだらうか？ 薊あざみ、茨いばら、いづれも此の自分が象徴される言ではないか。善人は生命に導かれ、悪人は滅亡に導かると言ひ給ふ此のイエスの福音は、悪き果を結ぶ腐れる樹をば明白に滅ぼす。自分はこゝに滅びなければならぬ。然も現在に於て、既に祈り得ざるまでに滅びてゐるではないか。

また實に、疲れ、喘ぎ、沈み、さながらに滅びつゝある自分の魂の、聖められざる腐れる樹のごとき穢れを、わたくしは省みながら、そのまゝ餘儀なく蠢蠢いてゐるのであります。こゝに、『善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや』

親鸞の言が、生々たる活氣に溢れて、私の全心を一時に動かしました。

善人さへも救はれる。まして悪人は、なほ救はれると言ふ親鸞！ 伐り放たれて火に投入れる地極一定の悪人こそ、善人よりも救はれると言ふ親鸞、それならば悪人を、イエスの神は滅ぼし、親鸞の彌陀は救ひ給ふか！

黒と白とを並べ見るごとき明晰な差別が、わたくしに忽ち感じられました。それと同時に、

『彌陀』とは何か？

従來の因襲的概念、それは便方のために架空せられしと感じられるごとき『彌陀』に對する獨斷より離れ、その名に囚へられることなく、私は初めて『彌陀』の二字を殆んど無私なこゝろで見ました。

第八章

我れ爾を救ふ

イエスを心に、身に、殊に生活に體驗すべき信仰の上に「聖書」は自分と一つになり得ず、そこに斷崖を仰いで佇むごとき、攀登の不可能な自身の素質を現實に見、更に母の生前の言による親鸞に懐しみながらも其の『信心』には、とりつきやうも無き之もまた絶壁を見るごとき没交渉な感じのみが自身に迫り、さうして、自身の幼時よりの過程が、眞に何の價値も無く、更に幾度か省みられるのでありました。

幻	想
の	
生	涯

十一二歳の時分より何の動機も無く漠然と萌しありし使命感、その時分に初めて教へられしイエスの神の國の福音、肉より靈への憧憬、何が爲の生？ 絶対の自分とは？ そこに圖らざる轉機より禪への心會、絶対即相對の菩薩行の概

念化、戀、從來の概念の崩壊、出家、性格の破綻、さうして、この一年半餘りの孤獨な思索、『否』の衷心語に一貫してきた小著の自敘傳『否』に書きました如き前半生、然も、依然として未解決な自分を、餘儀なくも觀る。この自分には、これが眞に餘儀ないことに、なほ餘儀なくも思はれる。この一年半餘りの孤獨の初め、『今度こそ』と生來の宿案を解決すべく、むしろ

幻の生
死の開
永遠の宿

幻
の
生

死の開
永遠の宿

死の開
永遠の宿

幻想の生涯
煩悩具足
輪廻を悦びて
死の開扉
永遠の宿願

潜かに獨り悦びを隠してゐた『今度こそ』の期待すらも、遂に、それは幻想に終らねばならぬ現在の自分を觀よ。これが父なる神の攝理なのか？ 父の愛は斯くまで自分を苦しめ給ふのか？

『讀むべきかな、われらの主イエス・キリストの父なる神、即ちもろもろの慈悲の父、一切の慰安の神、われらを、すべての患難のうちに慰め、我等をして自ら神に慰めらるゝ慰安をもて、もろもろの患難に居る者を慰むることを得しめ給ふ。そはキリストの苦難、われらに溢るゝ如く、我らの慰安もまたキリストによりて溢るればなり』

使徒パウロの言を見よ。イエスの生涯と十字架の苦難を仰け！ このくらゐの小さな患難が何か。

なほ前より私は次ぎの讚美歌を愛誦してをりました。

なやむものよわび人よ

めぐみの座にきたれや

天のちからにいやし得ぬ

かなしみは地にあらじ

さちなき身のなぐさめや

くやめるものゝ望みや

天のちからにいやし得ぬ

かなしみは地にあらじ

見よ、いのちのましむづの

みざよりわきいづるを

天のちからにいやし得ぬ

かなしみは地にあらじ

神に癒やし得ぬ地上苦は無い。イエスも共に苦るしみ給ふではないか。すべての患難をイ

エスにあづけよ！

然し、身の肉の患難は、あくまでも死にまで忍び得るとしましても、魂の苦惱を忍ばんとする其の氣力すらも失はれます弱き自身に於て、與へらるべき慰安を、遂に感じ得ない信仰の薄く更に弱き自分を、私は何としようもなく、たゞ壁と壁との間に狭く虐けられてゐるやうな自身が、

たゞ苦るしくたゞ朝夕を喘ぐやうに息してをりました。

今までの生涯、すべてが無意義だつたのだ。すべてが無意義だつたのだ。すべてが幻想に生きてきたのだ。なまじひに信仰の何のと、何の価値も無いではないか。生來より幻想に始終すべく最初から、さうした運命に呪はれてきたのだ。この先天的幻想が、イエスに觸れて濃厚になり、禪に會して覺めたと思ひつゝ、實は更に囚はれ、捨身すべく家を出て猶更に深く惑はされ再びイエスに、さうして微かに親鸞に、すべてが幻想に呪はれてきた生涯ではなかつたか？性格的に破れ、惡魔的な刺戟のうちに強ひて自分を毒してゐたと思はれる此の前の三年の生活こそ、反つて覺めてゐたのではなかつたか？

忍び得ぬ愚痴と疑惑とが、むしろ此の時の私自身を強く牽き初め、この時々には、それにさへ反抗し得ぬ自分になつてをりました。

『私は、だめなのだ！』

出家せし吉野山にて繰りかへししました最後の呟きが、圖らずも内に現はれました。

秋より冬に近くなりまして、私の肉は衰弱を加へ、日ごとに痩せてくるやうに思はれます自分の全身を、入浴の時ごとに私は寂しく眺めてをりました。兩腕がほそくとして、たゞ腕といふ形のみを、わづかに保つてゐるばかりになり、そこに肉らしいものは殆んど残されてゐないやうな、蒼白の上膊部を、かはるく私は左右に眺めました。その腕のそばに、あらはに波をうつてゐます肋骨が、さはればカツ／＼と響をたてさうに覺えられ、あり／＼と輪廓を現はして、腋の下から胸を圍む蒼白い膚のすぐ下に、ウネ／＼と横に桁を渡してゐるやうなものを、更に寂しく眺めました。

忍べ！ あくまでも忍ばねばならぬ。たゞ此の未解決な内の自分を何うするか？

棘莖、珠葱、などの類のごとくに、いかに外皮を剥いても剥いても、いつも皮のみが下から更に下から現はれ、最後に剥ぎつくせば、そこに何の實もなく、存在の全體が皮のみに始終する。かゝる類のものが、他ならぬ自分ではない

具	煩
足	惱

か。呪ふべき流轉的な前半生、さうして知り得たものは、皮のみの竦莖のごとき、珠葱のごとき自分の存在なのだ。なま／＼しい毒々しい臭い自分の皮を、私は自から無理に剥ぎとり剥ぎとりしてきた。剥がすにゐられなかつたのだ。然し、見よ、元來その奥に實の一つも無かつた自分ではないか。むしろ皮そのものに本能的な粘りづよい執着を、知らずに浸みこませてゐるのこそ、かうしてゐる自分の全體ではないか。毒々しく臭い皮のみの自分、これこそ私の眞實なのだ。少くとも現在の私の眞實なのだ。なほ、おそらくは此の世の生涯を終るまでの自分の眞實なすがたは、毒々しい臭い皮ばかりに過ぎて行くのではないか。剥けば剥ぐだけ臭く毒々しい。私は、今まで、あまりに幻影的な消息に憧憬して、空をつかみながら、そこに現れる蟹氣樓の窓々から洩れてきた香ひらしいものに、自から酔つてばかりきたのだ。實の無い自分ではないか。脱げよと教へられ、また精を盡くして脱ぐべく努めても、本來が脱ぎ得べきものではなく、もしも脱ぎつくし得たとしても、そこに皮のみの自分は無くなつてしまふのではないか。たとひ一枚を脱がうとも、更に二枚を剥ぎ得ようとも、あるひは五六枚を、幾枚を捨離し得ようとも、いづれは畢竟するところ、その本質に於て同じことではないか。

然も、自分の皮を、あくまでも脱離したい先天的本能は、どこから来るのか？ 省みればこの本能なしに自分は無く、更に省みれば、全體の皮なしに自分は無い！ この矛盾、脱ぎ得ぬもの、脱げば何ものも無かるべき自身を、あくまでも脱がすにはゐられない自分、この自分の未解決な矛盾を、どうすればいいのか？

さうして、『虚假不實』『煩惱具足』などの親鸞の言が、動かすべからざる權威をもつて、衷心を新しく衝くではないか。

親鸞は崩す。

『煩惱具足』それは然し衷に佛性を具へ、菩提心を有てるものが、煩惱に掩はれ絡まれてゐる心境を現はす言にして、私は然く『煩惱具足』を概念化してをりました。然し遂に自身の内なる現實が竦莖のごとき珠葱のごとき自分でありましたことを、餘儀なくも觀ます時に、『煩惱具足』とは煩惱のみにて全體が完了せる自分の魂の代名詞なのであることを、私は初めて知りまし

た。更に『煩惱成就の凡夫』との言こそ、眞に頷かされ、まことに之を是認しなければならぬ適切さを自身に感受し、實の無き煩惱成就の凡夫の心境は端的に『虚假不實』なることをも痛切に知らされました。

無ではない。煩惱のみが有る。虚假不實が有る。この實在の他に自分には何も無い。

『即心成佛』『即身成佛』などの語を棄て、『即心煩惱』『即身煩惱』と言ふべきこそ、これこそ自分の眞相でありますことを知りました時、私は初めて深き眞實感に觸れ得たかのやうに思ひました。然し、

これが即ち自分の眞實なのか？

なほそこに後を牽く絲のやうに、何とかして自身の向上的立點を認め、自身の魂を少くとも望みあるものとして意識したい欲求が、わづかに然し未だ根づよく残つてをりました。

遂に絶望すべくして、然も最後に一縷の自負が根づよく残續し、喘ぎながらも其處に私は暫く停滯してをりました。『イエス』と『親鸞』とに對し、絶壁と絶壁との間に狭く落ち、その底に醜く棘莖のやうに珠葱のやうに轉がつてゐる自分を日ごとに眺めてをりました。そのうちに、

親鸞の『彌陀の本願まことにおはしまさば、——親鸞がまうすむね、またもて、むなしかるべからず、さふらふか』との言が、私の衷心を最も深く強く時々動かすのでありました。

崩壊を
悦びて

親鸞の『信心』は『彌陀の本願』より出づると言ふ。

従前の自身の概念より離るべく努めながら、『彌陀の本願』を思ひます時に更に、『本願』より出づる『信心』即ち『信樂』は、

『信樂しんりやくといふは、即ち是れ如来の満足大悲圓融の信心海なり』

と、『教行信證』に述べられてありますのを、私は初めて眞新しいものに想ひ出しました。

同時に、この『信心海』の『海』の一字に強く心を牽かれ、そこに驚異が感じられました。

『信心海』とは何か？ 親鸞は何故に信仰を『海』と言ふのか？

なほ注意して讀みますれば、『群生海ぐんじやうかい』といひ『無明海』といひ『煩惱海』また『生死海』といひ、『海』の字が殊に多く綴られてゐるのであります。さうして、

『群生海』のうちの一人として此の自分がある。

この實感に激しく動かされました。同時に「群生海」そのものこそ苦惱に溢れ、人は其の海中に流轉しつゝある地上の現實相が、まさしく意識せられ、そこに自己の内より外を眺めます主觀と客觀とを一つにして、すべての現象が「苦海」との言のとほりに實感されるのでありました。この間にも私は屢祈り、祈りつゝ其の氣力は、既に従前のごとき熱と力とを、身體の精力と共に日ごとに不可抗に失ひ、その祈りは水よりあけられた魚が、たゞ口を開閉してゐるかのやうな有様でをりました。さうして更に、

『信樂といふは、即ち是れ如來の満足大悲圓融無礙の信心海なり。このゆへに疑蓋間雜あることなし。かるがゆへに信樂と名づく。即ち利他廻向の至心をもて信樂の體とするなり。しかるに無始よりこのかた、一切群生海、無明海に流轉し、諸有輪に沈迷し、衆苦輪に、繫縛せられて、清淨の信樂なし。法爾として眞實の信樂なし。こゝをもて無上の功德値遇しがたく、最勝の淨信獲得しがたし。一切凡小一切時中に、貪愛の心、つねによく善心をけがし、瞋憎の心、つねによく法財を焼く。急作急修して、頭燃をはらふがごとくすれども、すべて雜毒雜修の善となづく。また虛假詔偽の行となづく。眞實の業となづけざるなり。この虛假雜毒の善を

もて、無量光明土に生ぜん」と欲する、これかならず不可なり』

この親鸞の強き堂々たる正面よりの否定に會ひ、同時に、その内容の一々が、私自身の問歌しつゝある信仰を抉り取るばかりに、明白に指摘してありますことに、私はたゞ驚き、そのまゝ顔を『親鸞』の前に俯せるより他には、何ともし難いのでありました。然も、

『如來、苦惱の群生海を悲憐して、無礙廣大の淨信をもて諸有海に廻施したまへり。これを利他眞實の信心となづく』

と述べられてありますのを読みました時、こゝに初めて、私自身が獨り自分の信仰を作爲せんとして、そのために苦るしみつゝある矛盾が、手にとるばかりに省みられるのでありました。

『自分は信じてゐる』といふ此の自負。この自負こそ禍患の根柢をなしてきたのだ。自分が自分の信仰を握り、それを更に作りあげようと努めてばかりゐた此の一年半を見よ。この作爲が最初から矛盾してゐたのではないか！

こゝに眞に根こそぎに自身の全體が崩壊される如き大きな幻滅に對し、わたくしは眩惑を感じ、つゞいて自身の重荷を、脊なかの後に一時に下し捨てたかのやうな、すがくしい透명한意識に

つゞけられました。急性の熱病に冒されつゞけ、その症状は險惡にすゝみ、心身ともに衰へつくしたものが、熱度の波の最高に達し、そこに漸くとりとめて遂に一步を僅かに危険期より逃れ出でし如き状態の、衰へ疲れながらも何か知らず前途に希望ある如く直感されます患者、それが私自身でもあるかのやうに思はれるのでありました。

イエスは崩壊することを戒め給ふた。然も親鸞はあくまでも崩す。自分は今こそ、この自分の崩壊を悦ぶ。今こそ悦ぶ！

冬に入り、十二月になりました。

十二月五日。午前。わたくしは室内に立ち、上を少し仰ぎ眼の前の壁を見ながら、イエスの聖訓と使徒パウロの信仰とを一貫せる『神の國の福音』の主潮、その一貫せる秘義を知らしめ給へと、かすかに祈つてをりました。その秘義にこそ自身の完全に救はるべき福音の真髓が、必ず含まれ内在すべき直感のみを、私自身の微弱な一縷の生命感にしてをりました。この午前

の十時ごろ、上を少し仰ぎ眼の前の壁を見ながら祈りつゝ立つてをりました時、刹那に、

『我れ爾を救ふ』

頭の眞上より、まつすぐに落ちてくる如く、はつきりと聲が刹那に聞こえました。そのまゝ私は足もとに我れしらす崩れるやうに坐りました。その聲に打たれ、その聲が聞えました直後の刹那に、殆んど同時に、

『救ふためばかりの實在』

との直感、『絶対愛』の直感が、わたくしの衷に刹那に教へられ、私は自身の周圍と窓の外の建物と空とを想はず見ました。

『この自分一人が救はれん爲の全宇宙の建立』

この實感と感激に打たしまして、私は坐つたまゝ衷に大聲をあけました。あだかも下をむいて動かすにゐる蛙が、そのまゝ上の方に、何かの力によつて、完全にすくひあけられるかの如き、『たゞ救はれる』

との直感が全意識を了し、それは同時に『純他力』との直感を受け、そこに初めて親鸞の『信

心』の言が、會得されたと更に直感されるのでありました。(この刹那に續いて直感された
した廻心の内容に就きましては、小著『我れ爾を救ふ第一集に』書きました文字を、再び書き寫
すより他なきを感じます。故に、これを省略し、そこに書き足らざりしところを補ひ綴りま
す)

『我れ爾を救ふ』——即ち『爾を救ふ』ためのみに在り給ふ『我れ』こゝに神ありての自分で
はなく、自分ありての神、私自身が在ります爲のみに在り給ふ神、それは私一人を救ひ給はん爲
のみの實在なものであります。この全く新しき直感によりて、長いあひだを概念的に先入主に
なつてゐました神に對する私自身の從來の感じが、忽ち全的に一變させられました。さうして、
この新しき直感の全部が、たゞ『神は愛なり』との一語に盡きるのであります。それは『こ
のまゝ救はれる』純一の直感なのであります。神は神のみにて救ひ給ふための全實在である。
『救ふ』は即ち神の全格である。同時に、この直感の上に『神』といひ『佛』といふ概念的差
別は、わたくしの衷より全く拭はれました。『救ふ』——『救』のみを全意思とし給ふ絶對愛の
全人格的實在。この實在の直感、こゝに名の差別は全く無意義のことに思はれました。救ひ

給ふ爲のみの全人格的實在、救はれる爲のみに在る自分、この二つを一つに結び給ふ『救』この
純他力の『救』こゝに生後に初めて私は生き得る自分を内に感じました。この『初めて』に新生
の悦びが湧き、何の碍りもなく救はれる自分、本來の元始より斯くの如く救はるべき爲に存在
せし自分、斯く何の碍りもなく救はれなければならなかつた自分でありましたことに、この時に
初めて氣づきました。この『氣づき』即ち『信心』それは自身が『信じ仰ぐ』と言ひ現さんよ
りも、最も端的に『信する、こゝろ』そのものであり、この『こゝろ』は端的に氣づかせられし
『こゝろ』與へられし『こゝろ』即ち『たまはりたる信心』なのであります。『救はれる』との
『信心』は『救ふこゝろ』が衷に與へられし同一心なのであります。こゝに初めて親鸞の『如
來よりたまはりたる信心』との言が、そのまゝ何ものよりも明晰に、わたくしの内に一つになつ
て感じられました。こゝに自分はそれならば眞宗の信者になつたのか？

『信者』この言よりも『救はれる者』との實感が最も良く相應し、『信じる者』その『信じる』
との言は既に自身の實感には直ちに矛盾して感じられました。

信じるのではない。 たゞ救はれる。 この他には何も無い！

たゞ救はれる。この他には何も無い透明な純一な直感に充たされ、こゝに従前の雑多な概念は、盡く崩され、消え、何の価値も無く、たゞ救はれる自分のみが、天地の間に一人存在するのでありました。それと同時に、

真宗が何かは自分に解らない。まして自分が真宗の信者であるとは断じて言へない。たゞ自分は救はれる者なのだ。

この『救はれる者』との自覚は、従來のやうに、みづから作りし自覚ではなく、救ふこゝろそのものより私の衷に生まれし抜きがたき與へられし自覚なのであります。同時に、この自覚の上に、キリスト教といひ真宗といひ其の所屬の差別は、おのづから關心なき無意義なものに思はれるのであります。また實に、キリスト教に於て、殊に真宗に於て、知識にも體驗にも何らも殆ど眞實に知るところなき自分が、あるひはクリスチャンとして、または真宗の御同行としては、然く今もなほ意識し得ずをりをします。たゞ救はれる。これより他には何も無い。

死	開
の	幕

『救ふ』とは？

これが疑問として成り立つ隙もなく、

『救ふ』とは、よくしてくださることである。

かく直感されますのと同時に、『よくしてくださること』は、究竟するところ、遂に救ひ給ふ全人格的實在者それは絶対者と、全く同じものにされるのであります。静かに會得されました。こゝに、更に靜かに幕を除いて前方を見わたすやうに、私自身の死後の前途が、生後に初めて意識されました。いつ絶対者と同じものにされるか？

死後に於ける自我の完成、そこに『救ひ』は成就される。

自身の死！ この時に私は自分自身が『死ぬもの』でありますことに初めて氣づかせられました。

新しい智慧。然も、自分自身の最も明白な最も平凡な『死』の存在を、今に於て初めて知り得たとは、いかに愚劣な自分であらう。

浅からぬ羞耻を獨り覺えながら、然し、遅くとも此の新しい智慧を、他ならぬ自分自身の大きな事實を、はからずも教へられた現在に、強き感謝が湧きました。同時に自分自身の『死』。これこそ真に大きな事實でありますことに、また初めて氣づかせられ、『死ぬもの』としての智慧を與へられましたことに、大きな恩寵が猶ほ深く新しく感謝されるのでありました。

『死』に對する自覺。自分は死ぬ。我れ爾を救ふ——死なざる者に自分は、今こそされたのだ！

『死』然も何ものを征伏する死も遂に自分を死なしめ得ざる『救』永遠に實在し給ふ大いなる至愛の慈悲者が、この自分一人の『救』の爲のみに在り給ひ、その至愛者の絶對的永生と、一つにされる『救』こゝに『死』は自分に無いではないか！有り得ない『死』！

こゝに『未來』の意識が鮮かに湧き、同時に親鸞の『淨土往生』との言が、今は自分の内省そのものになつて明晰に實感されるのでありました。

『淨土往生』これは遂に方便教では無かつた！救はるべき人間の究極の大きな眞實を顯はす言であつた！

あくまでも従前の先入主の概念に禍ひされ、それが如何ばかり執拗に私自身を惑はしてゐましたか、初めて獨り悔まれるのでありました。そこに、

『夫れおもんみれば、信樂を獲得することは、如來選擇の願心より發起し、眞心を開闡することとは大聖矜哀の善巧より顯彰せり』

との『教行信證』の『信卷』の序文が、そのまゝ禮拜されますのと同時に、

『しかるに末代の道俗、近世の宗師、自性唯心にしづんで、淨土の眞證を貶し、定散の自心に迷ひて、金剛の眞信にくらし』との親鸞の斷乎たる判決の下に、自身の既往の罪狀を指摘されるごとき畏怖を深く感じさせられ、翻つて、今これらの親鸞の敘述に、そのまゝ歸依させられます新しき自分を、更に深く悦びくつ、十二月五日を過ぎしました。

『死』の解決。然も自分の死ぬことをも知らなかつたうちに、圖らずも『死』を解決されし自分。永生の實感を與へられし自分。

こゝに私自身の前途には、たゞ洋々たる永生が、私自身のものとして、實在するのでありました。この未來感の永遠性を直感せしめられ、更に後の過去を振りかへつて見ますときに、同じく過去の永遠性が自身に直感されるのでありました。たゞ然し前途は光に明るく照らされ、後は昏く闇のみに満ち、さうして、こゝに、宿業しゆくごうとの意識が、更に初めて内に湧き、自身の無始以來の存在が、生前に遡つて直感されるのでありました。然もそれは『煩惱具足』の黒い凝塊が、永遠の過去より現在まで、苦るしく流轉し來て、絶斷なく今に及べることが意識されます。強き直感でありました。同時に、『宿業』この言が、いかに畏ろしき、苦惱に充ち満てる言であつたか、私を戰慄させました。

『宿業』これは他のことではなかつたのだ！ 自分自身の事實であつた。

こゝに私は現在の『自分』に對して、眞に可憐な然も弱く悪き存在を見ました。同時に、『宿業』との實感と共に、この人生の他に、なほ幾多の或ひは限りなき無数の世界が存在すべく直感されまして、そのうちの一つとして『現世』との言が、深き實感と共に領けるのでありました。あゝすべてが不思議ではないか。

あらゆるもの、眞に不思議な存在、さうして、この不思議な現象の一種類の『人間』なるものの弱小さが、まざぐと心に浸みて自覺されますのと同時に、この弱小な悪き私自身の存在に對し、この如き存在なればこそ、たゞ救ひ給ふほかには何も有り給はざる絶對愛——それは純なる『至心』にて在り給ひ、『我れ爾を救ふ』——『至心廻向』の『救』——『惡人正機』——親鸞の言が、そのまゝ内に一つになつて感じられるのでありました。

現在する自分、この『現在』を自身の上に解決すべく、そこに先づ永遠より永遠への自身を解決するのでなければ、現在する自分は最も當然に解決し難き事實に、初めて氣づかせられました。この明白な平凡な最も當然な自身の事實、そこに『生死の一大事』との言が、自身に何よりも現實な痛切な先決すべき生の第一義の重要事でありまことに、更に同時に氣づかせられました。

永	遠
の	
宿	題

『生死の一大事』

この一大事の解決なしに、どこに人生の根柢が有り得よう！

自分は餘りに小さき自身の現實に執着し、その爲に、自身の先決すべき大きな懸案を、永遠の懸案を忘れ、または他の事に紛れさせ、たゞ自分の手もとで生を弄ぶ小刀細工ばかりをしてゐたのではないか。この現在の人生は、自身の永遠の懸案を解決する爲の唯一の場所なのだ。この生死の解決の他に、何の第一義的の根本問題が、この人生にあるのか。

現在する人生以前の自身の世界、更に人生以後の自身の世界、それらの存在が直感されますと同時に、『流轉』との言が、自身の上に痛切に實感されるのであります。然も、この永遠より永遠にわたる自身の懸案の解決、あるひは未解決の、それは何よりも切實な永遠的な大きな宿題に比べて、この人生のみの存在に始終する諸般の人間的な問題が、いかばかり小さく、根柢は弱く、脆く、とりもなほさず流轉的な、はかなきものであるのか、明白に意識されるのであります。眼前を流動し行く變幻的な有形無形の事象、これらの種々相に餘りに關心し、知ら

ざるうちに惑ひ、遂に囚はれ、その世間的相の流動に牽かされては、自身もまた永遠の懸案を忘れて流轉し行く、知らざる流轉、無明の心識、こゝに『火宅無常の世界』が、現に實在するではないか。この人生を貫く唯一の永遠的宿題——生死の一大事に比べてこそ、即ち『よろづのこと、みなもて、そらごと、たはごと、まことあることなき』ことを知らされる。これこそ眞に正しい智慧ではないか。これは弱きあきらめに墮ちての言ではなく、人生の眞相に對する強き正視の斷言ではないか。弱き者こそ正視の強き瞳をもたずして、ものゝ眞相を指摘する徹底さの前に回避する。

こゝに人間の悪性に悲嘆し、宿業の力を受受し、『救』によりて永遠の懸案を解決せしめられ、そこに人間界の相對的善惡を超越し、人生の眞相を正視せし親鸞の強さ、永遠の根柢の上に立つ底力を含みての強さが、私の胸の全面を壓迫するやうに感じられ、こゝに『親鸞』の名より強き切實な刺戟を私は初めて受けました。

私は『永遠』を忘れてゐたのだ。眞の自分を忘れてゐたのだ。

この自身の最も重要な懸案を、圖らずも即時に断ちきることく解決されし『たゞ救はれる』との與へられし直感、それは自身の力に消さんとしても消しがたく、消えず。あだかも、魂の髓に刻印されしごとき我れならぬ明晰な直感——『一念』の、ここに、唇を衝いて、内より我れしらず、

『なむあみだぶつ』

と、言はざるうちに進むやうな念佛を、~~其~~後に初めて私は想はず稱へました。

『稱へずにゐられぬお念佛やでな』

と、母が食事の折にも、時々獨語のやうに言つてをりましたことが、遂に私に頷かれるのでありました。さうして、

『彌陀の誓願不思議に、たすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念佛まうさんと、おもひたつころのおこるとき、すなはち攝取不捨の利益に、あづけしめたまふなり』

母の膝の前にて、初めて示され、それを讀みますまや否や、方便教として拒絶しました右の

「歎異鈔」の第一節が、七年後に初めて自分の眞實を現す第一義の言として、自身と遂に一つになつて頷かれるのでありました。また同時に、

『易い御信心、易い御信心』と母が言つてゐた。『たゞ救はれる』まことに難易を超えて餘りに易い、この『救ひ』を難かしいものに、私は自分獨りで勝手に反抗して來たのだ。獨り反抗し獨り苦しむ獨り悩むでゐた愚さを見よ。然も、さうして苦しまずにゐられなかつた自分の悪しき存在に、さうした先天的の宿業が自身に今こそ思はれるではないか！

『あんたは業が深い』

と言ひました母。

『彌陀の五劫思惟の願を、よく／＼案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなり。さればそくばくの業をもちける身にありけるを、たすけんと、おほしめしたちける本願のかたじけなさよ』との親鸞の述懐。

いづれも身にしてみても深く扶られるやうに感じられました。

『彌陀の本願』これを普通の概念より眺めてのみるた其の自分の概念こそ、自身にとつて容易

276

ならぬ反抗の障礙を自分で作つてゐたのであつた。自分ながら大きな反抗に自身を禍してゐたのだ。

「彌陀の本願」これは自分一人を救ひ給ふ絶對慈心の名ではないか！

第九章

神の國に入ることは
いかにそれ困難なるかな
他力のなかに他力なし
他力には義なきを義とす

イエス
朝雲

276
0.12

「神の國に入ることはいかにそれ困難なるかな」

『救ふ』この一つのみを全生命として實在し給ふ『彌陀の本願』の絶対慈心に對し、祈るべきものは、祈るべき餘地は、最も當然に有り得ない。

祈を敢て制するのではなく、おのづから絶無にされます『救』の絶対慈心、それより受けます如上の直感に充たされ、こゝに自から作つてゐました従前の祈りなるものが、いかに徒爲な、餘計な、然も反抗的なものであつたを、痛切に知らされました。

自分の信仰、自分の祈、自分の思索、この他、すべての有らゆる『自分』が、『自分』そのものの全部が、大きな反抗の塊なのであつた。

更に、『我れ爾を救ふ』こゝに『たゞ救はれる』純一な直感を與へられし時、自身の祈つてをりましたイエスと使徒パウロに就いての思索的欲求もまた、救ひ給ふ慈心の他のものを、徒らに求めてゐたのでありました。そこに、圖らずも、偶然に、全く想はざりし慈心が、直通して眞上より與へられし、それは『我れ爾を救ふ』純一の慈心なのでありました。

求めずとも、願はずとも、祈らずとも、救はんが爲めのみに在り給ふ全人格的實在者が、即ち、たゞ救ひ給ふ。

無信心有信心
求めざるに與へ給ふ
反逆のまゝを

ものは、直ぐにその意地は、最も當然に有り得ない。

此の如く、則ちその意地は、最も當然に有り得ない。……
即ち、……
計、……

自分が、……
の全部……

……
……
……

……

『祈らねばならんといふのは情ないことや』——『祈らねば聽いて下さらん神さまが何になるね』

母の言が、正しい智慧の言として、初めて私に頷けるのでありました。新聞をも読み得ざりし母、時々麥のみの御飯を自分のみに焚き、如來さまの御苦勞を忘れぬやうにとたしなみ、家中の御飯の初めには、お釜の中央の眞白なそれを御佛飯にさしけてゐました母、それらの母の日常の所作を、ひそかに笑つてをりました私自身の傲慢さが、今は殊に母の亡きあとに激しく悔まれるのでありました。

淨土に還り、美しい佛になられた母が、この今の自分を、いかばかり悦んでゐてくださるであらう！

母と自分とが今は正しく一つになつて感じられます『御信心』の上に、『救』との意識が、更に確かに、明晰に、衷に成り立つて感じられるのでありました。さうして、『たゞ救はれる』こゝに自身の信仰の間歇は、何の碍りにも成り得ないのでありました。何らかの信仰的實感をつかまんとし、その實感によつて心を安んずべく努め、そこに『救はれし』との意識を充實させ

爲に、一年半を悩みありし其等のすべてが、自身の心識の紛糾のみに始終しましたことは、眞に當然なのであります。こゝに謂はゆる『自力の信仰』が、遂に崩壊すべき當然の最後を、自身の上に私は切實に觀ました。

無信心
有信心

たゞ救はれる。こゝに自身の信仰は絶無なのだ。信仰と疑惑との相對を絶して、たゞ救ひ給ふ慈心。こゝに信疑を絶する信心が、更に有無を絶して有る。

わたくしは幾度か内を省みました。

『おまへに信心が有るのか』

『いえ、私にはありません』

それならば、

『おまへに信心は無いのか』

『然し、限りなく有ります』

有るかと省みれば、どこにも無く、無きかと省みれば、既に溢るゝばかりに、充たされてゐます信心、こゝに、なほ溢るゝばかりの慈心が直感されるのでありました。自身の信仰の有無のごときは、こゝに全く省みるべき価値なきものでありました。

信じて救はれるといふのではなかつた。疑ふても、なほ疑ふても救ひ給ふ。この慈心によりて信疑を絶する信心が生まれて下さる。こゝに疑ひが晴らされざるを得ない。絶対慈心より生まれる絶対信心。この信心は疑惑に相對する信仰——自身の信仰とは、全く本質を別にする。他力信は絶対の至心より生れ、自力信は人間の常に變動する感情の一變化であるのに過ぎぬ。疑つても疑つても遂に疑ひ得ぬ他力信の絶対味。疑へば消える自力信の幻滅。この二つの相違を内に省みて、

『自分は救はれてゐるか』

『救ひ給ふお方に尋ねよ』

問ひつ答へながら新しき他力信を私は眞に感謝しました。同時に、この大なる慈心のまへに、自身の感謝の遂に如何に小さきか、更に省みられました。

信疑の相對を絶する他力信。こゝに『他力』の意義もまた、自力と他力との相對を絶する、

『純他力』なる實感が、初めて私に會得されたかのやうに思はれるのでありました。さうして、

『他力のなかには、自力とまふすこと、さふらふと、きゝ候ひき。他力のなかには、また他力とまふすことは、きゝ候はず。他力のなかに自力とまふすことは、雜行雜修定心念佛を、こゝろにかけられて候ふ人々は、他力のなかの自力のひとくゝなり。他力のなかには、また他力とまふすことは、うけたまはり候はず』

他力のなかに他力なし。自他力の相對意識を絶する純他力の眞實さを、親鸞のかくも明白な言に見る。

さうして、『たゞ救はれる』他力のなかに他力なき、純一なる他力に於て、

『他力には義なきを義とす』

との親鸞の言が、まことにそのまゝ私自身の衷に受け納れられるのでありました。

求め ざる に與 へ給 ふ

永遠より永遠にわたる自分の大きな懸案を、それは意識するにつれて、ますます大きな『生死』の懸案——まことに絶大な懸案を、弱小な自身の力によつて解決し得るものと、最初から獨斷してゐた深い錯覺、この錯覺こそ親鸞を徹山に二十年の間を悩まし、遂に満たされざる苦行と祈願とに終らせたのではなかつたか。然も、この錯覺より解かれし刹那にこそ、人は初めて生きる。『他力』に生きる。永生に眼ざめる。然も、自身の力に求めても遂に得られざる此の『他力』の賜與。たゞ與へられる純他力至心の廻向。見よ、自分は之を少しも求めてはゐなかつた。自分は『死』を意識せずゐた。永生の實在をも知らずゐた。自分の『生死』の懸案を解決すべく少しも望んでゐなかつた。それは自分の意識の外にある懸案なのであつた。然も、それは圖らずも、偶然にも、純他力の『救』に於て、自身の死に氣づかせられ、同時に、その解決は完全に『救』に依つて成了されるとの他力信の直感が求めざるに與へられた。こゝに従前の自力の錯覺と、現在の他力信の正しき領きとの差別を見よ。

この正しき直感の領きに於て、死後の自己の完成、生死の解決、それは『成佛』の言によつて現されます絶対愛に對し、人間の現世に於ける善惡の相對感のごときは、あまりに小さくして、優に超越して餘りある自由さが、直ぐに感受されるのであります。

さうして、この包みこまれるごとき大なる自由な實感の上に、『歎異鈔』に現れてゐます『親鸞』と『唯圓』との對話が、なほ深く受けいられるのであります。

唯圓——念佛まうしさふらへども、踊躍歡喜のこゝろ、おろそかに候ふこと、また、いそぎ淨土へまいりたき心の候はぬは、いかにと候ふべきことにて、候ふやらん。

親鸞——親鸞も、この不審ありつるに、唯圓房おなじ心にてありけり。よく／＼案じみれば、天におどり、地におどるほどに、よろこぶべきことを、よろこばぬにて、いよく／＼往生は一定とおもひたまふべきなり。よろこぶべきこゝろを、おさへて、よろこばせざるは、煩惱の所爲なり。しかるに、佛かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫と、おほせられたること

なれば、他力の悲願は、かくのごとき我等が爲なりけりと知られて、いよいよ頼もしく覺ゆるなり。また淨土へいそぎまいりたき心のなくて、いさゝか所勞のこともあれば、死なんするやらんと、こゝろほそく覺ゆることも、煩惱の所爲なり。久遠劫より今まで流轉せる苦惱の舊里はすてがたく、未だ生まれざる安養の淨土はこひしからず候ふこと、まことによく煩惱の興盛に候ふにこそ。名残り惜くもおもへども、娑婆の縁つきて、力なくしてをはるときに、かの土へはまいるべきなり。いそぎまいりたき心のなきものを、殊にあはれみ給ふなり。これにつけてこそ、いよく大悲大願はたのもしく、往生は決定と存じ候へ。踊躍歡喜のこゝろもあり、いそぎ淨土へまいりたく候はんには、煩惱の無きやらんと、あやしく候ひなまし。

この至深の慈心のうちに、「善人なほもて往生をとぐ。いはんや悪人をや」との親鸞の言が澄澗たる宗教的眞理の實感として私を動かし、更に、

無明長夜の燈炬なり

智眼くらしと悲しむな

生死大海の船筏なり

罪障おもしろとなげかざれ

願力無窮にましませば

罪業深重もおもからず

佛智無邊にましませば

散亂放逸もすてられず

親鸞の「和讃」を拜してゐますうちに、しみじみと心の底より、生まれて初めて、眞に感謝しても感謝しても、感謝に限りのありません。『救』に安心の涙を衷心に覺え、こゝに大いなる自由が、あだかも鎖より解き放されましたやうな自由が、悦び感じられるのであります。さうして、「西遊記」の孫悟空が、釋尊に反抗すべく、神通力の有る自身の雲に乗り、幾億里の天上を驅りて、五つの並べる碑に署名して歸り來り、釋尊の前に出で、自身の力を誇りました時、釋尊が示し給ひし五つの指の一つに、孫悟空の書きました署名が記されてゐました爲に、さすがに不遜なりし猿の悟空の慢心も遂に碎かれしとの、興味ありし譬喩が、私に、そゞろ聯想されるの

でありました。

反	逆
の	
ま	を

反抗しても、反抗しても、最初から慈光のうちを泳いでゐたのであつた。

力を極めて反抗、然し、それは猿の悟空のやうに、慈光のうちには小さな反抗なのであります。而も、反抗を棄て随順することによつて初めて赦されま

す反動的な相對愛ではなく、反抗そのまゝを攝取し、最初より包含し給ふ絕對愛に於て、こゝに其の愛によりて自然に反抗より随順へ、おのづから化せられて往くのであります。さうして、この絕對攝取の直感を現すべく『悲願』といひ、『大悲』といひ、『本願』『佛智』などの親鸞の言また舒述より、まことに絕對攝取の直感に適應せる深き味はひを、その多くの佛語より、初めて受けるのであります。同時に、この絕對慈心の大きさ、それは意識に餘りて絶大な實感は、さながら『海』によつて表現されますことの、更に深く然るべきことが、親鸞によつて端的に領かされるのであります。

すべてを含み、汲めども汲めども盡きず、探るにつれて限りなく深く、さうして、すべてを淨

化し給ふ。

これらの『海』の意識とともに猶ほ、

『海』といふは、久遠よりこのかた、凡聖所修の雜修雜善の川水を轉じ、逆謗闍提、恒沙無明の海水を轉じて、本願、大悲、智慧、眞實、恒沙萬徳の大寶海水となる。これを海のごとしと喩ふるなり。良に知りぬ、經に説きて煩惱の氷とけて功德の水となると言へるが如し。願海とは二乘雜善の中下の屍骸をやどさず。いかにいはんや人天の虛假邪偽の善業、雜毒雜心の屍骸をやどさんや。かるがゆへに大本（無量壽經）にのたまはく、聲聞あるひは菩薩、よく聖心を極むることなし。たとへば生れてより盲たるものの、ゆきて人を指導せんと欲はんがごとし。如來智慧海、深廣にして涯底なし。二乗の惻るところにあらず。たゞ佛のみ獨り明らかにさとりたまへり』

「教行信證」の「行卷」の一節が、私の内感を靜かに開發し、殊に次ぎの親鸞の同じ『行卷』の舒述と引照とを、私は幾度か繰返して讀むやうになりました。

『敬ふて一切往生人等にまふさく、弘誓一乘海は、無碍、無邊、最勝、深妙、不可説、不可思

議の至徳を成就したまへり。何をもての故に、誓願不可思議なるがゆえに。悲願は、たとへば大虚空の如し、もろくの妙功德、廣無邊なるが故に。なほし大車の如し、遍くよくもろくの凡聖を運載するが故に。なほし妙蓮華の如し、一切世間の法に染せられざるが故に。なほし善見藥王の如し、よく一切煩惱のやまひを破するが故に。なほし利劍の如し、よく一切驕慢の鎧を斷するが故に。なほし勇將の幢たての如し、よく一切のもろくの魔軍を伏するが故に。なほし利鋸の如し、よく一切無明の樹をきるが故に。なほし利斧の如し、よく一切の諸苦の枝をきるが故に。なほし善知識の如し、一切の生死の縛をとくが故に。なほし導師の如し、よく凡夫出要の道を知らしむるが故に。なほし涌泉の如し、智慧水を出して窮盡すること無きが故に、なほし蓮華の如し、一切のもろくの罪垢に染せられざるが故に。

なほし疾風の如し、よく一切のもろくの障霧を散するが故に。なほし好蜜の如し、一切功德の味を圓滿せるが故に。なほし正道の如し、もろくの群生ぐんせいをして智城に入らしむるが故に。なほし磁石の如し、本願の因いんを吸ふが故に。なほし閻浮檀えんぶたん金の如し、一切有爲さいうゐの善を映奪えいだつするが故に。なほし伏藏の如し、よく一切のもろくの佛法を攝するが故に。なほし大地の如し、

三世十方一切の如來出生するが故に。なほし日輪の光の如し、一切凡愚の癡闇を破して信樂を出生するが故に。なほし君王の如し、一切上乘人に勝出せるが故に。なほし嚴父の如し、一切のもろくの凡聖を訓導するが故に。なほし悲母の如し、一切凡聖の報土眞實の因に長生するが故に。なほし乳母の如し、一切善惡の往生人を養育し守護したまふが故に。なほし大地の如し、よく一切の往生を持つが故に。なほし大水の如し、よく一切煩惱の垢を滌そぎぐが故に。なほし大火の如し、よく一切諸見の薪を燒くが故に。なほし大風の如し、あまねく世間に行ぜしめて所碍なきが故に』

これらを、單に佛語の並列と見ることは許されない。親鸞の實感として體驗として、靜かにこまかく、この舒述に接する時に、こゝに自身の衷にも、親鸞と七百年を隔て、時所を絶する同一の信心味にまで、これらの舒述によりて靜かに導かれる。さうして、殊に、右の舒述の終りに、

『まことに奉持すべし。ことに頂戴すべきなり。』
と、結ばれてありますのを見まして、

見よ、すべての叙述が親鸞の體驗より出づる。この親鸞の實感に照らされて、私は成長せしめられる。最も切實に、最も私自身に應はしく。

こゝに『如來』に對する従前の虚しき空靈的な概念が、今は限りなく溢るゝばかりに充實せる絶對慈心の實在として、それは自分の有ります事が即ち『如來』の實在し給ふ何よりも明證として感じられ、之等の内的成長の智慧を、親鸞によりて最も切實に指導されて往きます自身にとりまして、然も永遠の人間的問題が、こゝに端的に認識せられ解決せられます親鸞に接します時に、單に十三世紀にありて日本佛教の一宗派を開創せし一高僧としての『外的親鸞』よりも、あらゆる人間の最も痛切な生死の宿案を『如來』によりて解決せしめられ、その解決の内容を更に至深に味到せし、人間の永遠性を豊かに含める『内的親鸞』が、わたくしに遂に限りなく親しく、近く、すぐ傍に、さうして衷に、時所を絶する懐かしさと共に、師として感じられるのであります。

293

年を越しまして一月になりました時、わたくしの肉は衰弱のために、一月あまりを床に就きました。この間に、たゞ「教行信證」のみを私は幾度となく始終を通じて反覆しつゝ、獨り床の上に横になつてをりました。さうして親鸞が少くとも八年の時日と、五十五種以上の佛典により、親鸞自身の直感より統攝し系列し完成せし「教行信證」に於て「佛」と「人間」との交渉に關する永遠的解説の、さながらにまた『海』の如き智慧の存在を、わづかに初めて窺ひ得るのであります。そこに親鸞——人と佛とを一身に統攝せる一人格——を、それは「一如」の『即』として直感ではなく、さながら「不二」としての凡佛不二の大なる深き一人格を有する九十歳の老比丘に接して師事します實感を『親鸞』より全心に受けるのであります。さうして、一月あまりの臥床の後に、漸く春にちかく、床を離れました私は、ある日の午食後に、更に「教行信證」を読みかへしながら、イエスの『神の國の福音』を顧みてみました。

第十章

いかに生くべきか

イエスの『神の國の福音』を顧みながら、いはゆる「山上の垂訓」に於て、イエスの第一語として編集されてあります言の、

『幸福なるかな、靈の貧しき者！ それ天國は彼等の有あなればなり』

との意義に對し、わたくしは初めて従前の理解と異なる宗教的眞理の内うち在せるを、直感し得たかのやうに思はれるのであります。

『靈の貧しき者』

この靈的貧者の幸福、それは天國を所有すとの、イエスの讚歎の言が、そのまゝ現在の私自身における幸福感を言ひ現はすものとして、碍りなく受けいれられるのであります。

たゞ救はれる。この他には何も無い。

たゞ救はれます純他力の慈心のまへに、こちらの心は全く無一物であるのこそ純眞な信心なのであります。『救』の絶對慈心、こゝに救はれる者の心は全く單純に透明な、とりもなほさず靈的貧者の境涯にあるのであります。この純他力に於て自力の絶對無なる『靈の貧しき者は幸福なるかな。それ天國は彼等のものなれば也』とのイエスの言が、現在の私に従前とは異なる

る如上の新しき意義を感じさせるのでありました。従前に於て『貧しき者』は、神に對する懺悔者として、謙遜者として、註釋書に解かれ教へられてゐますのを、然く私も概念的に理解してをりました。然し、

『念佛には無義をもて義とす。義とは行者のはからひなり』

親鸞の言に於て、純眞な靈的貧者の心的消息が、最も明晰に道破されてゐるのであります。

『はからひ』の絶無な無義の義の靈の貧しさ、こゝに『懺悔』も『謙遜』も何ものも有り得ないのであります。

かくてイエスの言、更に使徒たちの言に含まれてゐます宗教的眞現が、私に従前と異なる新しき意義を以て、徐かに啓示的に感受されるのであります。

親鸞の多くの著述また書簡または語録などを、「教行信證」と共に読みかへしながら、わたくしは日に新しく啓發され純化され單一にせられてゆきます自身の直感に照らして「新約聖書」を改めて読みなほしてみました。さうして、自身の直感より反射的に會得されます『神の國の福音』は、私に初めて、その奥義を啓示されるやうに更に深く直感されるのであります。これ

と同時に、従前の自身のキリスト教的信仰が、その自力を根底的禍因として、當然に錯誤してゐましたことが、極めて明白に會得されるのであります。

自分は最初から決してキリスト教信者ではなかつたのだ。

こゝに、私は、畢竟するところ、自身に與へらるゝ實感に照して、親鸞の記録を読み、イエスまた使徒たちの記録は読みます他に、生命感ある何の心策も無きことを、既往の全く徒爲なりし過程に省みて痛切に知りました。然も同時に、いはゆる自身の直感の内容は、殊に親鸞によりて、成長せしめられ啓發されるのであります。かくて自身の直感と「聖典」また「聖書」と互ひに照應して、更に新しく發程し始めました。さうして、すでに得たり。

と獨り自身を肯定して、そこに停滯し、また慢じ甘んじて、知らざるうちに幾度か墮落してをりました既往の蹉きを、ひたすらに怖れてをりました。即ち、信心を獲さへすれば、それで好いのだ。

とのみ思ひこみます『はからひ』の無きが如き此の妥協の自心こそ、即ち大きな『はからひ』

の壁を建て、獨り然く極めこみ、慈光を反つて遮ぎつてゐます似て非なる「無義の義」の概念的信心、それは他力と思ひこみます自力信心を、ひたすらに畏れてをりました。さうして、「真宗聖典」と「新約聖書」との二冊のみを、この後の春より秋までの八ヶ月に、幾度か読みかへしてをりました。

イエスカ親鸞か

この究極するところ、

信仰——信心に於て、一つの物象を、同時に同所で撮影した二つの乾板があるとして、その二つを齊しく重ねてみるならば、そこに二枚の乾板は、全く一つの象を現すであらう。「真宗聖典」と「新約聖書」とは、如上の二つの乾板なのだ。わたくしは其の寫真機なのだ。

『如來』といひ『神』といひ、然し自身一人に直感されます、それは、まことに全く一つの象が靈的乾板に現像されるのであります。更に三ヶ月の後の冬になりまして、私は漸く『我れ爾を救ふ』の一篇を自身の備忘録たらしむべく書きました。

然し、永遠の生死の懸案そのもの、解決に於て、不安と安心との對立を絶する安心を與へられ

ながら、なほまだ、現在する脚下の生活に於て、何等の依るところ無き缺陷が内に争ひがたく感じられるのであります。

いかに生くべきか。イエスは捨身の聖道を、明白に教へ、親鸞は然し黙つてゐるのではないか？

いかに生くべきか？

永遠の生死の懸案——『後生の一大事』を解決せしめらるゝ『救ひ』に對し、『現世』のみに於ける生活の信仰を求める如きは、まことに極めて小さな欲求であるやうにも思はれるのであります。然し、そこに尙ほ争ひがたい悩みが隠れてゐました。

いかに生くべきか？ この懸案が如何に極小のものであつても、その本質に於て、この現在生の懸案もまた殆ど至深の疑ひを、私に與へる。こゝにまだ自分には現世的な未解決が残されてゐるのだ。すべてを解決せよ！ 未解決を残すな！

真に選ばれたる者のみが徹し得るイエスの『窄き路』それは十字架捨身の聖道が、明白に宣言せられ、然し、それは遂に踏みがたく捨てがたき、難路でありますことを、わたくしは出家せし吉野山に於ける僅に一月餘りの事なりしとは言へ、それが自身の本質には及びがたく、徹し得ぬ聖路なりしことを、今更に幾度か省み顧みて見ました。

外の自分を捨てることは、一應は易い。内の自分を捨て得ることは、遂に自分には不可能だつた。十字架を負ふ捨身道、その一步すらも、内の自分は踏み得なかつたのだ。内も外も『否』に徹し得べく、然く如實に體驗し得る聖者的素質は、自分に絶無だつたのだ。イエスの道は尊い。しかも自分には『尊い』のみにして、それが自分の道には成り得ぬ『尊さ』なのだ。さうして親鸞は？

これを、真宗の人々に聞きますれば『真諦』と『俗諦』との二つに差別し、生死を解決すべき『真諦』は他力によりて救はれ、現世に處すべき『俗諦』は自力によりて佛恩に報すべく、即ち、報謝業のいとなみこそ、此の人生に處すべき『俗諦』の道であると、説かれ、或ひは『信心は他力。修養は自力』と明白に差別して教へられるのであります。然し、

『真俗二諦』この二元的な心境に自分は安んじ得ない。二元、ここに自分の悩みがある。

また『他力』と『自力』と、これを何うして然く概念的に差別して考へられるのか？

本能的に、すべて『一元』のうちに解決せずにはゐられぬ衷心の欲求が、私を再び惑はし初めました。さうして、自身の生活を顧みます時、そこに、

生活意識の統一が無い。

この缺陷が明白に私自身を傷つけ、ここに在來の真宗の教義のうちに、謂はゆる『真諦門』と『俗諦門』とを差別されてありますことが、掩ひがたき不満と不安とを、私に感じさせるのであります。

親鸞御自身は何と言はれたのか？

然し、親鸞に就いて之を解決すべく、私は、徒らに失望してをりました。その著述および書簡その他のうちに、生活の信仰に就いては、何等かの明晰な舒述が親鸞に依つて發見し得ないのであります。『懺悔と感謝』によつて進むのだ』とも、真宗の人々は親鸞の舒述を断片的に引照して私に教へて下さいました。然も『懺悔』といひ『感謝』といひ、それらの心象が、現實

の生活相を更に統一するところなき心身の乖離と矛盾とを、餘儀なくも自身の上に見ます時に、それは依然として私に未解決な生の懸案なのでありました。然も親鸞に於て、いはゆる眞俗二諦の差別的觀念の如きは、殆ど無關心なるまでに、少しも其れに言及することなく、『いかに生くべきか』の疑惑は殆んど没交渉なるかのやうにさへ、何の具體的答解をも親鸞より受け得ないのでありました。同時に、眞宗の教義に於て、然く『眞諦』と『俗諦』とが明白に差別して組立てられてありますことが、あだかも奇異なことに思はれるのでありました。

いかに生くべきか？ 『救ひ』は之に没交渉なのか？

然し、これは遂に有り得ざることとして、私は此の没交渉——眞俗二門の差別に、衷心より服し得ないのでありました。これと同時に、こゝに尙ほ悩みと不安とに陥りつゝ、更に一年半を過ぎしました。

現在生活の信仰。

これを求めて摸索しつゞけ、徒らに同じ圓周の上のみを廻つてをりました

一年半の後に、初めてまたも此の徒爲な幻影の殻を、たゞひとへに慈心によりて崩されました。

（この一年半の過程に就きましては、小著『我れ爾を救ふ第三集』の叙述と日記などを、再び繰りかへすのを避けまして、こゝに其れを收約的に書かしていたゞきたく思ひます）

いかに生くべきか？

この懸案を人間が作爲します其の分別自身に於て、わたくしは自ら繩を結び、自分を縛りつけてゐるのであります。

善惡の二つを宿業のまゝに、生死永遠の懸案を如來の慈心のまゝにとの親鸞の言、この『任せよ』との言は、そのまゝ、『無義の義』の『はからひ無き』絶対歸依のすがたを現し、そこに『まかし心』もなき至純な歸依のこゝろが、圓彫りに現れてゐるのであります。

自力對他力を絶する純他力——信對疑を絶する淨信——歸依對反抗を絶する純歸依の『任しごゝろ』こゝに『いかに生くべきか』の『はからひ』もまた、最も明かな反抗なのであり、人間の謂はゆる自力より出づる相對的心識の分別であり繫縛なのであります。

すべてを任せよ。こゝに『任す』とも意識せざる至純の歸依ごゝろ——眞の任しごゝろが、

慈光の薫習にまるめられて、信心味の純熟より馴致される。

こゝに、『いかに生くべきか』との分別の主角がおのづから圓く、碍りなく、あだかも不正多角形なりし概念的心象が、正しき圓にまで練られて行くかのやうに、圓く化育されて往くのでありました。然も、何等の妥協なく、諦めなく、最も明晰に、力にみちて、絶對歸依の無碍なる心象に純化されて往くのでありました。なんの分別もなくして、然も最も明晰な、ありのままな絶對是認の風光のうちに、『いかに生くべきか』との作爲的な懸案は、おのづから除かれ、即ち知らざるうちに解決され、いはゆる『真諦』と『俗諦』との二元的差別は消され、ありのままの生活意識が、然も『ありのまゝ』に停滯することなく、淨化せられ、生長し、進展され、この育成の生命感が、そのまゝ淨土へ通入し往くのでありました。こゝに、

『しかれば大悲の願船に乗じて光明の廣海に浮みぬれば、至徳の風しづかに衆禍の波轉ず。

すなはち無明の闇を破し、すみやかに無量光明土にいたりて、大般涅槃を證し普賢の徳に遵ふなり。知るべし』

親鸞の此の舒述が、殊に私に頷かれるのでありました。

見よ。生はすゝむ。『はからひ』無しにすゝむ。何の真諦か。何の俗諦か。たゞ無碍の一道を往く。『一道』である。二道、三道は有り得ない。純他力賜與の生は、南無阿彌陀佛の名によりて、淨土へすゝむ。

こゝに親鸞の體得に成る『即得往生』——地上新生の真意が、明晰に頷かれ、『淨土』それは脚下より直に無碍の一道をすゝみ往く正しき前面にある絶對實在なのでありました。この正しき一道に立たしめられる地上發程に於て、『即得往生』の廻心——新生が、純他力信心のみを全的内容として成立せしめられるのでありました。こゝに地上の『救ひ』が體驗的に實在しこの新生は永生へ、そのまゝ同一道の上に伸長され充實されて、日に新しく日々新しく、おのづから任運無作に育成されつゝ淨土へ往くのでありました。

こゝに親鸞が、人間の地上生涯に對して、何等の規箴も、範疇も、まして模範も遺すことなく、まことに無關心に、素純に、知らざるごとく風格の、無作なる透明な印象を、殊に晩年の生活に示しつつあることが、初めて私に頷かれるのでありました。

まことに無義の義に充實せる親鸞！

こゝに凡聖不二の圓熟せる至深の尊い人間味が、大いなる生命感に充ちて、その圓融無碍なる凡人聖者の明晰な面影を、『親鸞』と名づけられた最も現實の人に、初めて正確に仰ぎ得るのでありました。

イエスカ親鸞か。 いづれが私自身の眞髓に徹し得て、遂に『一つ』に成り得るか？

わたくしは、今、自身の衷を省みまして、何よりも明白に悦び言ふ。 とりもなほさず、

『親鸞』こそ！
と。

イエス
の道は
何處に

イエスは明白に、最も明白に、捨身の十字架を負へと言ふ。捨身出家の路を歩めと宣言する。

『地上に、平和を投ぜんとして、我れ來れりと、爾ら考ふること勿れ。 平和

に非ず。

反つて劍を投ぜんとして我れ來れり。 そは我れ人を其の父に反し、娘を其の母に反し、

嫁を其の姑しよとのに反して、別れしめんとて來ればなり。 かくして人の敵は、彼れの家の者どもな

り』(マタイ傳福音書十章三四—三六節)

見よ！ かくも明白にイエスは出家せよと宣言する。『人の敵は彼れの家の者どもなり』この出家的生活こそ、イエスの宣べし神の國に適ふ生活の福音でなくて何か。

『我れよりも、父や母を慕ひをる彼れは、我れに應こたはざる者なり。 我れよりも子や娘を慕ひ居る彼れはまた我れに應はざる者なり。 誰れにても己おのが十字架を取りて、我が後うしろに隨行せざる

者は、また我れに應はざる者なり。 己が魂を見出しし彼れは、これを失はん。 而も、我が爲

が爲に己が魂を失ひし彼れは、これを見出さん』(同右三七—三九節)

見よ！ 十字架捨身の道に死して生きよと、イエスはかくも明白に言ふ。

『爾ら斯くの如く、爾らのうち凡そ誰れにても己が一切の財産を思ひ切らざる者は、我が弟子たること能はず』(ルカ傳福音書十四章三十三節)

見よ！ 所有を盡く捨てよと、イエスは斯くも明白に宣言する。

このイエスに従ふべく、その出發に、即ち捨身出家すべき者の出發に際して、イエスは更に何

と宣言したか。

「ある者、イエスに向ひて言へり『爾、いづこに行くとも、我れ爾に従はん』而してイエス彼れに言へり『狐は穴を有ち、天の鳥は巢をもつ。されど人の子は頭を横たへる所を有たず』

(ルカ傳福音書九章五七—五八節)

見よ！ 人の子イエスは枕する所を有たざる出家の生活を明白に體驗し、こゝに『我れに従へ』と宣言する。續いてイエスは言ふ。

「イエスはまた別の者に向ひて言へり『爾、我れに従へ』されど彼れに言へり『爾、我れに先づ往きて、わが父を葬むることを許せ』されどイエス彼れに言へり『爾、死人をして己等の死人を葬らしめよ。爾！されど、爾往きて神の國を弘めよ』」(同右五九—六〇節)

見よ！ 捨身出家の新生涯へ出發すべく、在家の事は父を葬むるさへ許さざりしイエスの最も明白な宣言を見よ！ イエスは續いて言ふ。

「また別の者イエスに言へり『我れ爾に従はん。主よ！されど爾、我れにまづ我が家の者に離別を告ぐることを許せ』されどイエス彼れに言へり『手を擧に着けながら、背後のものを

と眺めをる者は、一人だも神の國に適せざる者なり』」(同右六一—六二節)

見よ！ 出家捨身の新生涯へ出發すべく、即ち、神の國の生活に新生すべく、家人への告別すらも許さざりしイエスの宣言を見よ！

魂に、身に、生活に、『神の國の福音』の信仰に徹すべく、純真なるクリスチャンたるべき者は、かくも最も當然に、一切を捨て、十字架を負ひ、家を出で、イエスに従はなければならぬ。あゝ純真なキリスト教信者が、今、幾人あり得るのか？——

イエスは質問されて、妻を離縁すべからざる一夫一婦の宗教的道德を宣言した。然し、弟子たちが『もし妻に對して、人の義理かくの如くならば、彼れ娶らざるにしかず』と言つた時に、イエスは更に宣言した。

『すべての者、この言を容るゝを得ず。たゞその與へられたる彼れらのみ。そは母の胎内よく、かく生まれし程のユーマーク(獨身者)あればなり。また人によりてユーマークとされし程のユーマークあればなり。また天國の故に己れをユーマークとせし程のユーマークあればなり。この言を容れ能ふ彼れをして、この言を容れしめよ』(マタイ傳福音書十九章一一—一二

節) (左近義弼氏ヘレン語よりの直譯に依る)

見よ！ イエスに従ふべく、クリスチャンとして徹すべく、『己れヲユーヌーク——獨身者とする』こそ、イエスの眞意に適ふものではないか。

見よ！ 十字架捨身の聖道にこそ、クリスチャンとしての純眞の生活がある。

キリスト教信者——クリスチャンは、イエスの最も明白な宣言を體得せよ！ 福音の信仰と生活とを統一せよ！ さうして、私は告白する。私はイエスに従ふべく家を出た。その聖道を踏み得ぬ自身の本質を内に見た。最後に、信仰に於ても、すべてを崩壊された。

キリスト教信者は「聖書」の全福音を最も當然に信ぜよ！ 「聖書」を生きしめよ！ イエスを生かせ！ 部分的福音を妥協的に信じてクリスチャンの名を冒すな！ さうして、私は告白する。眞のクリスチャンたり得ざる自身の本質を内に見る。殊に生活に見る。私はイエスの福音を遂に體験し得ない凡夫である。

自 然 法	自 然 法
雨 の 生	雨 の 生

いかに生くべきか。 さうして、いかに生きつゝあるか。

省みて、現在する生の意識のうへに、碍りなく照應したまふ親鸞聖人のお言の
一つが、常に、おもひあはせられます。

『自然じねんとふは、自じは、おのづからといふ、行者ぎやうじやのはからひにあらず。然ねんといふは、しからしむといふことばなり。 しからしむ、といふは、行者のはからひにあらず、如來のちかひにてあるがゆへに、法爾ほふにといふ、法爾といふは、この如來の御ちかひなるがゆへに、しからしむるを、法爾といふなり。 法爾は、この御ちかひなりけるゆへに、おほよそ行者の、はからひのなきをもて、この法の徳のゆへに、しからしむといふなり。 すべて人の、はじめ、はからはざるなり。このゆへに、義なきを義とすと、しるべしとなり。 自然といふは、もとよりしからしむ、といふことばなり』 (自然法爾の事、末燈録)

この、『もとよりしからしむ』本來に然らしむる純他力の救ひにおいて、人間の魂は、地上生のうへにも、『はからひ』無き『義なきを義とす』とまでに無碍むじに解き放され、さうして、『し

からしむる化育により『自然のことはりにて、柔和忍辱のこゝろも、出でくべし』（歎異鈔）に、純他力信に芽ぐまれし新しき生は日につれて生々と『自然のことはりにて』伸長し進み行く。かくて『はからひ』無き、範疇なき、作爲するところなき、無自省のうちに、『自然法爾』の育成の道は、信後現在の足跡に體驗せられ行く。愛、佛わが衷にいまして念願したまふ祈り、すべてが自然に、衷に發育せられて環境に能動し、『惡趣は自然に閑づ。道に昇ること窮極無く、行き易くして人なし。その國は逆違せず、自然の牽くところ』（無量壽經）なるを體得せしめらる。あまりに往くに易く、人なきまでに易く、逆違せざる自然の道に、嘗て發程し得ず、あるひは進み得ざりし阻障を作りしものは、すべてが私自身の『はからひ』なのであります。入みづからが作る大いなる妨げの巖のごとき『はからひ』よ。しかも、この巖こそ、とりもなほさず私それ自體のすべてなることを省みさせられ、『もとよりしからしむる絶對慈心の、人——自身をとほして自身の呼吸よりも近く現實化されつゝある内外のすがたを、地上新生（即得往生）の後より現在の上に、それは闇のみなるうちに四五寸の白道のごとく貫かれあるを願ひますれば、この純他力の自然の育成に照らされて、『いかに生きべきか——いかに生きつゝあ

るか』との『はからひ』もまた、おのづから跡なく消えゆく、まるめられゆく、闇が光に融けゆくやうの法爾化育の實在を、なによりも確かに感じずにもられませぬ。

かくて、芽ぐまれし純他力賜與の生は、あまりに行き易く、人なきほどに易き道を、自然の牽くところにより、もとよりしからしむる化育のうちに、日ともにも生々と伸長し行く。「いかに生きべきか——「いかに生きつゝあるか」は、こゝにおのづから、解決されてゐることを感じます。

日ともにも生々と伸長し行く。この生は、いづこへ行きつゝあるのか。

『自然といふは、もとよりしからしむ、といふことばなり。彌陀佛の御ちかひの、もとより、行者のはからひにあらずして、南無阿彌陀佛とたのませたまひて、むかへんと、はからはせ、たまひたるによりて、行者の、よからんとも、あしからんとも、おもはぬを、自然とは申すごと、きいてさふらふ。ちかひのやうは、無上佛にならしめんと、ちかひたまへるなり』（自然法爾の事。末燈鈔）

いかに絶大な慈音であらう。芽ぐまれし新らしき生は、『無上佛』にならしめらるべく、こ

の人生を『はからひ』なしにすゝみ往く。

『彌陀の淨土へは、死してから往くにあらず、信の一念に、はや發足して、やがて、死すると
き行きつくなり』(膳橋)

『御同行がたに、ひとつの癖がある。その癖といふは、御法義をいたゞいたのを、箱入りに
して置いて、さうして死に際に出して使ふといふやうな聞きかたをして居るのがある』(七里恒順
師)

この土のうへに、古くにも、今にも、崇^{たか}き言、美しき行ひは、あまりに多く、躍躍として胸に
迫るやうに感じられます。十一歳の時に、隣家の牧師さんより『神の國の福音』について、初
めて教へられ、神、罪、十字架、愛、救主イエス、などの、驚異に充ちし言を聞きまして、幼き
魂を動かされました少年時代の私は、家庭の傳統的訓育のもとに陸軍の偕行社に附屬する小學校
に入り、陸軍の幼年學校に入り、士官學校に入りし、殆んど十年間を「聖書」に獨り親しむで居
りました。士官學校にて、はからざる轉機より禪に心會し、少尉になりて再び悩み、家に遺書
して山の寺に奔り、剃髮して隠れありしを發見せられて家來り、切に出家を願ひて許されず、

陸軍大學校に入り、充たされざる悩みのまゝに退校を命じられ、支那の革命にあづかり、願ひて
漸く陸軍の籍を脱する宿望を果たし、新聞記者となり、悩めるまゝに性格的に殆んど破産し、再
び支那の革命に奔り、歸り來りて圖らざる事に惑ひ、世と離れありし間に、二十餘年前の幼き時
よりの宿案なりし『神の國の福音』と、そのイエスの十字架の祕義により、光を仰ぎて再生の恩
寵に救はれしと成し、自身が、幾度か更に崩され、その度びとに幾重にも自身を繕^{つくろ}ひ、建てなほ
さんと切りに努めし信仰を、遂に力なきまでに崩壊せられて、初めて衷に親しき『親鸞』の純他
力慈音に、わづかに觸れつゝ、更に惑ひ、深まりゆく惑ひのうちに、淨土往生の慈音と、神の國の
福音との、二つが交響し偕調し然も錯綜する最後の陥穽に落ちて、遂に起きあがり得ざる『はか
らひ』の絆に自縛して悩めるまゝを、

我れ爾を救ふ

この聲を聽きて、在來の絆^{きずな}を遂に解かれ、従前の「聖書」に對する傳統的義解は衷に一變せら
れ、いはゆる福音は、純他力信仰の慈音に歸趨して、始めて元來の本旨を完くするを知らしめら
れ、衷に交響し偕調し錯綜しありし二つが一つに歸して、完き「救」の一慈心のうちに、悩みは

頓に拭はれ、自身の従前の謂はゆる信仰の痕もまた、時ととも消されてゆくのでありました。

再び世に接觸するあひだに、『救』と生くべき道との、いかに統攝し調和せらるべきかの地上生の矛盾の上に、惑ひつゝ彷徨し、この惑ひの『はからひ』の繩を、更に自然に解かれ、今、こゝに妻あり、子ありて、さらぬだに辱づべき凡夫の、崇き言、美しき行ひの一つをさへ全うし得ざりしものに新しく芽ぐまれありし生は、あくまでも『自然法爾』の慈手に、日に新しく化育せられつゝ、今なほ『はからひ』ながらも、なほそれを不斷に崩し捨てしめられつゝ、無義を義とする白道を浄土へ、すゝみ往かせられつゝあります。されば、『南無阿彌陀佛』とたのませたまひて、むかへんと、はからはせたまひたる』この救はれし機法一體の熟し往く生こそ、しづかに、内に創造せられ、同時に内より外を、おのづから改化しつゝ、浄土へ進む。

『この南無阿彌陀佛は、阿彌陀さま也。わたくし也と存じ申候』(日生信女)

『南無といへば、阿彌陀きにけり、一つ身を、われとやいはん、佛とやいはん』(親鸞聖人の歌と傳へらる)

自然の白道を往く。この地上生よ。『親鸞』も、この『義なきを義とす』る任運無作の道を

歩み往きたまひしごとく、私かに感じられるのであります。この白道を往きつくす究竟の消息は

『ちかひのやうは、無上佛にならしめんと、ちかひたまへるなり。無上佛とまふすは、かたちもなくまします。かたちも、ましまさぬゆへに、自然とは、まふすなり。かたち、ましますと、しめすときは、無上涅槃とは申さず、かたちも、ましまさぬやうをしらせんとて、はじめて、彌陀佛と、まふすぞと、きゝならひて、さふらふ。彌陀佛は、自然のやうを、しらせんれうなり』(自然法爾の事。末燈鈔)

かくて、人間の相対的意識のうへに、芽ぐまれ得る他力の『彌陀佛』の名による絶対佛心を仰ぐべく。

『この道理を、こゝろえつるのちには、この自然のことは、つねにさたすべきに、あらざるなり。つねに自然をさたせば、義なきを義とす、といふことは、なを義のあるになるべし。これは佛智の不思議にてあるなり。』(自然法爾の事。末燈鈔。愚禿親鸞。八十六歳)

すべて不思議なる、この生のすがたよ。

「わが、はからはざるを、自然とまうすなり。これすなはち、他力にてまします。しかるを自然といふことの、別にあるやうに、われものしりがほに、いふひとの、さふらふよし、うけたまはる。あさましく、さふらふ」(歎異鈔)

「念佛には、無義をもて義とす、不可稱、不可説、不思議、のゆへにと、おほせさふらひき」(歎異鈔)

いかに生くべきか。いかに生きつゝあるか。こゝに、まかしごゝろも無き歸依、信心も無き信順を育てたまふ自然の慈光により、人さまぐに育てられ往く。されば、往き易くして人なき自然法爾の地上生について、ほとんど何ごとも仰せられざりし親鸞さまに、かへつて深き頷きを感じることあります。(小著「親鸞と更生」より)

イエスカ。親鸞か。いづれが私自身の真髓に徹し得て、遂に「一つ」に成り得るか。わたくしは、今、自身の衷を省み、既往の反抗的生涯を顧みまして、何よりも明白に、再び悦

びて言ふ。

『十字架より法爾へ』

とりもなほさず、

『親鸞』と、言ふ。

~~わたくしは、今、自身の衷を省み、既往の反抗的生涯を顧みまして、何よりも明白に、再び悦びて言ふ。~~
~~『十字架より法爾へ』~~
~~とりもなほさず、~~
~~『親鸞』と、言ふ。~~

附
錄

親鸞聖人の祈りと懺悔

佛	願
共	に

本願」であります。

「彌陀の本願、まことにおはしませば、釋尊の説教、虚言なるべからず。佛説、まことにおはしませば、善導の御釋、虚言したまふべからず。善導の御釋、まことならば、法然のおほせそらごとならんや、法然のおほせ、まことならば、親鸞がまうすむね、またもて、むなしかるべからず候か。詮ずるところ、愚身が信心におきては、かくのごとし」(歎異鈔)

この「彌陀の本願」によりて救はれますためには、

「彌陀の本願には、老少善惡のひとをえらばれず。たゞ信心を要とすとすべし。そのゆへは、罪惡深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。しかれば、本願を信ぜ

んには、他の善も要にあらず、念佛にまさるべき善なきゆへに、悪をもおそるべからず、彌陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆへに」(歎異鈔)

「往生淨土の爲には、たゞ信心をさきとす。そのほかをば、かへりみざるなり」(執持鈔)

即ち信心一つのみにて救はれるのであります。さうして、この信心は、

「如來よりたまはりたる信心」(歎異鈔)

「信樂(信心)といふは、すなはちこれ如來の満ち足れる大悲、圓融無礙の信心海なり。このゆへに、疑蓋、間雜あることなし。かるがゆへに、信樂と名づく」——「如來、苦惱の群生海を悲憐して、無礙廣大の淨信をもて諸有海に廻施したまへり。これを利他眞實の信心と名づく」(教行信證。信卷)

即ち、人みづからが作る信心にあらずして、あたへらるゝ信心なのであります。

「この信心を一心といふ。この一心を金剛心といふ。この金剛心を大菩提心といふなり。これすなはち他力のなかの他力なり」(末燈鈔)

即ち、他力信心なのであります。この「他力」とは、

「他力のなかには、自力とまふすこと候とき、候ひき。他力のなかに、また他力とまふすこととは、きゝ候はず」(末燈鈔)

即ち、自力に相對する他力にあらずして、自力對他力を絶する「他力のなかに他力なき」即ち純他力信心なのであります。

「他力といふは、如來の本願力なり」(教行信證。行卷)

この「彌陀の本願」より發せらるゝ純他力信心において、いはゆる欲求的なる「祈り」は、最も當然に有り得ないのであります。

あらゆる宗教のうちに、「淨土眞宗」のみが祈り無き宗教と稱せらるゝ所以の一つが、こゝにあるのでありませう。

二

この賜與せらるゝ純他力信心において、救ひ給はんがためのみの「本願」たゞ一つを全人格となしたまふ「阿彌陀佛」の至心と、この至心が人の裏にあたへられて成る信心の「南無」とは、即ち一つなのであります。

「南無の言は歸命なり」——「歸命は本願招喚の勅命なり」(教行信證。行卷)

人の衷に生まれ出づる「南無阿彌陀佛」とは「南無」即ち歸命する信心と、「阿彌陀佛」、一つになされし名であります。救はれし者のこのろの名であります。口に唱へます稱名念佛は、このこのろの自然の發露であります。

「信心よろこぶそのひとを、如來とひとしときたまふ。大信心は佛性なり。佛性すなはち如來たり」(淨土和讃)

「淨土の眞實信心の人は、この身こそ、あさましき不淨造惡の身なれども、心はすでに如來とひとしければ、如來とひとしと、まふすこともあるべしとせられたまへ」(末燈鈔)

「信心まことなる人をば、佛とひとしとまふす」(末燈鈔)

この「南無阿彌陀佛」の名によりて現はさる、「如來とひとし」き純他力信心において、いはゆる「祈り」の餘地は絶無なのであります。一つになされある「南無阿彌陀佛」において、祈るべき空虚も無く、佛と人との間に一髮の隙も無いのであります。

「佛號むねと修すれども、現世をいのる行者をば、これも雜修となづけてぞ、千中無一ときら

はるゝ」(高僧和讃)

稱名念佛しながらも、なほ現世における利益を祈る者は、「雜修」の「はからひ」をなすもとして、千人のうちに一人も救はるゝものなしとせらるゝのであります。

「他力と申すことは、義なきを義とすと、まふすなり。義とまふすことは、行者のをのをの

はからふことを、義とは申すなり」(末燈鈔)

即ち、純他力信心の「無義をもて義とす」る南無阿彌陀佛において、「祈り」は既に大いなる「はからひ」なのであります。

親鸞聖人の「淨土眞宗」のみに、「祈り」の無き所以の一つが、ここにるのであります。

三

親鸞聖人は、然し、殊に御晩年において、「いのり」との語を、お手紙のうちに書いておいでになり、祈りたまひし聖人を、そのお手紙のうちに拜し得るのであります。

このお手紙は、いづれも京都より關東の性信御坊へ送らせたまひし御消息なのであります。拔萃しますれば、

「さればとて、念佛をとめられ、さふらひしが、よにくせごとの、をこりさふらひしかば、それにつけても、念佛をふかくたのみて、世のいのりに、こころをいれて、まふしあはせたまふべしとぞ、おほえさふらふ」

「念佛を御こころにいれて、つねにまふして、念佛そらんひとくくの、この世、のちの世までのことを、いのりあはせたまふべく、さふらふ。」

「たゞ、ひがふたる世のひとくくをいのり、彌陀の御ちかひにいれと、おほしめしあはじ、佛の御恩を報じまいらせたまふに、なりさふらふべし」(御消息集)

こゝに親鸞聖人の「いのり」を、あきらかに拜し得るのであります。

四

「大無量壽經。 眞實の教。 淨土眞宗」(教行信證。教卷)

「淨土眞宗」の正統は、大無量壽經に依るのであります。

「それ眞實の教をあらはさば、すなはち大無量壽經これなり。この經の大意は、彌陀、誓を超發して、ひろく法藏をひらき、凡小をあはれみて、えらんで功德を施することをいたす。釋迦、

世に出興して道教を光闡して群萌をすくひ、めぐむに眞實の利をもてせんとおほしてなり。こゝをもて、如來の本願をとくを經の宗旨とす。すなはち佛の名號をもて經の體とするなり」

(教行信證。教卷)

大無量壽經の本旨は、「如來の本願」にあり、經の基は「佛の名號」即ち「南無阿彌陀佛」にあるのであります。

この如來の救濟の「本願」は、

「我れ無上正覺の心を發せり。 願はくは、佛、我が爲に、廣く經法を宣べたまへ。 我れ當に修行して、佛國を攝取し、清淨に無量の妙土を莊嚴すべし。 我れをして世に於て、速かに正覺を成り、諸の生死勤苦の本を抜かしめたまへ」(大無量壽經)

との祈願より發し給ひ、而して、十方衆生に對する救濟の四十八願を光闡したまひ、重ねて三誓の願を以て結び給ひし、純他力救濟の慈音を、大無量壽經によりて拜し得るのであります。即ち、「淨土眞宗」の正依經なる大無量壽經は、如來本願に救濟の祈願による永生の書なのであります。

この如來本願の完成せられし佛の御名は、即ち、光（智）壽（慈）無量の「阿彌陀佛」にて在まし、この御佛の至心が、人の裏にあたへられし名號は、即ち「南無阿彌陀佛」なのであります。同時に、あたへられて裏に生まれたまひし「南無阿彌陀佛」は、この如來の至心廻向によりて救はれし人の新しき身格の名でありまして、佛と人と不一不異の身格を現はす名號みやくがうなのであります。

「彌陀の本願」より成立せられし「南無阿彌陀佛」の内在的身格の第一人者を、即ち、親鸞聖人に仰ぎ得るのでありまして、聖人の「いのり」は、そのまゝ「南無阿彌陀佛」の裏より發露せらるゝ、「いのり」にてありたまひ、そのまゝ「彌陀の本願」と一つなる祈願しんげんに念願にてありたまひし如く拜し得らるゝのであります。

聖人の「いのり」の内容と本質は、即ち、佛に對してする欲求の祈禱にあらず、また、自身のみが敢てする獨語にあらず、すべて、みづから作る祈禱にあらずして、「彌陀の本願」より出づる衷なる「南無阿彌陀佛」より、おのづから流露せらるゝ、本願發露の「いのり」にてありたまひ、念佛を迫害する者に對して、

「これにつけても、念佛を、ふかくたのみて、世のいのりに、こゝろをいれて」と仰せられ、「世のために」

「詮じさらうふところは、御身にかぎらず念佛まふさん人々は、わが御身の料はおほしめさずとも、朝家の御ため、國民のために、念佛をまふしあはせたまひさふらはい、めでたふさふらふべし」

と世の平和のために、

「御念佛こゝろにいれてまふして、世のなか安穩なれ、佛法ひろまれ、と、おほしめすべしとぞ、おほえさふらふ」

として、「念佛をふかくたのみ、御念佛こゝろにいれてまふして」即ち内在の南無阿彌陀佛より出づる「朝家の御ため、國民のために、世のなか安穩なれ、佛法ひろまれ」との「世のいのり」こそ、その本質において「彌陀の本願」と同じ一つなりたまひし親鸞聖人の「いのり」を、こゝに拜し得るのであります。

この「いのり」には、聖人が常に「念佛を御こゝろにいれて」と仰せられるのでありまして、

なほ、念佛を誹謗する人々のために、「いのりあはせ、たまふべくさふらふ」と仰せられ、「ひがふたる世のひとつをいのり、彌陀の御ちかひにいれと、おほしめしあはく」

など、いづれも「彌陀の本願」の慈心そのまゝが、聖人の「いのり」として現はれたまひし「南無阿彌陀佛」の自然流露の祈りを聖人に拜し得るのであります。

ここに祈り無き浄土真宗の祈りを、親鸞聖人によりて示されあることが、おろそかならず仰がれるのであります。

五

純他力信心が、「はからひ」を絶無とし「無義を義とす」ることとく、「南無阿彌陀佛」より發露せらるゝ「いのり」も、自力對他力を絶する無義の義の、おのづからなる機法一體の念願の現はれであります。

この「いのり」は、「南無阿彌陀佛」の生ける憶念のはたらきであります。

この「いのり」は、如来とともにせしめらるゝ無私の祈りであります。

この「いのり」は、みづから作る「難修」の祈禱にあらずして、あくまでも、おのづからなる

如来純他力の至心より發露せしめらるゝ、めぐまれし「いのり」であります。

この「いのり」は、有念にあらず、無念にあらずして、他力のなかに他力なき「いのり」であります。たゞ廻向せらるゝ「いのり」であります。

六

親鸞聖人の浄土真宗に、いはゆる「祈禱」はあくまでも絶無なのであります。

しかも、至純眞實の「いのり」は、親鸞聖人によりて、更に、「彌陀本願の廻向」によりて、あきらかに示され、而して救はれしものゝ衷に、最も當然に恵まれるのであります。

さうして、純他力信心のまへには、浄土真宗に祈り無しとせらるべきこそ、最も至當なことなのであります。

否

親鸞聖人は、深き内省に徹したまひ、そこに、いたましき御自身のすがたを、悲しみ歎きて見つめたまひし、懺悔の聖者にてありたまひしやうに拜せられます。

一淨土眞宗に歸すれども、眞實の心はありがたし。・虚假不實こけふじつのわが身に於て、清淨の心もさらになし。外儀ぐわいぎのすがたは人ごとに、賢善精進現せしむ。貪瞋邪偽おほきゆるゑ、奸詐百端けんさひゃくたん身にみたり。悪性さらにやめがたし、こころは蛇蝎のごとくなり。修善も雜毒なるゆゑに、虚假の行とぞなづけたる——「これは愚禿が、かなしみなげきにして、述懐としたり」(愚禿悲歎述懐)

これは聖人の御述懐にてありたまひ、即ち、聖人の自己認識の一面を、こゝに拜し得るのであります。然も、聖人の淨土眞宗の信仰を、衷に受けある人と然らざるとを問はず、すべて自己内省の深きにつれて、この親鸞聖人の御述懐は、このまゝに、すべての人の内なる真相を語るべき悲歎の言として、遂には自身に納け入れなければならぬ、歎けども歎きがたき各自の内の事實であると想はれ得るのであります。同時に、いはゆる自己に眼ざめし人とは、この歎きて歎きがたき自身の内なるすがたを、そのまま偽り飾りなく、正しく視つめ得し人なのでありませう。「愚禿」とは、親鸞聖人が御自身のことを仰せられし御言であります。釋尊が、「涅槃經」のうちに、「我れ世を去りし後、世は亂れ、國は荒れ、人々が互ひに掠めあふことがあらう。そ

の時代には、飢餓のために出家する者が、多く有るであらう。かくのごとき者を名づけて禿人と謂ふ」と、説かれました。飢ゑて、食を乞ふために、出家する此の「禿人」の、更に愚かなる者と、「親鸞」そのものを、一つに内感したまひし聖人の「愚禿」との御言は、あながちに謙虚なる御告白として、拜すべきではなく、まことに聖人御自身の、純主觀の御自覺そのものこそ、即ち「愚禿」の二字によりて、最も切實に現はされ得て、こゝに「愚禿」と「親鸞」と一つなることの、さながらに聖人の御獨語にてありたまひしと拜察されるのであります。同時に、この「愚禿」の二字に含まれる意義こそ、聖人が御自身に懐きありたまひし、そのまゝの懺悔のみこゝろと拜されるのであります。まことに「愚禿親鸞」の四字は、聖人の御著述のうへに數おほく、この字を拜します度ごとに、まことに懺悔そのものにてありたまひし聖人に接しまするのであります。

「誠に知りぬ、悲しきかな愚禿親鸞、愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚ぢやうしゆ(救はれし者)のかすに在ることを、よろこばず。眞證の證に近づくことを、たのしみます。はづべし、いたむべし」(教行信證。信卷)

かくも仰せられし聖人に、悲しみ、歎き、耻ぢ傷みたまひし「愚禿親鸞」を、まのあたりに拜し得るのでありまして、こゝに、「愛欲」また「名利」の、あらゆる煩惱、罪惡を、あきらかに否定したまひし聖人に接し得るのであります。

二

「凡夫」「凡人」「人間」などの言が、煩惱また罪惡に始終せるもの、名であるとしまするならば、この名は、いづれも、みな、悲歎し、慚愧し、傷心すべき、即ち否定すべきものである。こそ、親鸞聖人の内なるこゝろなりしと想はれるのであります。これに反して、煩惱を肯定し、罪惡を是認し、みづから安價に自身の愛欲なり名利なりと妥協し、甘んじて凡夫あるひは人間の名に、停まり滞らんとするのみならず、さらになほ、惡を造りて碍りなしとする如き、似て非なる信仰こそ、即ち自身が作る自力信仰の一つなのであります。

聖人の體得し給ひし純他力信仰は、あくまでも煩惱罪惡を否定し、この全く否定すべき罪惡の深重なる、煩惱の熾盛なる凡夫なればこそ、これを御佛の救ひのみによりて救はせたまふ、こゝに純眞なる信仰が、御佛より與へられ、自己否定の深きにつれて、これを救はせ給ふ御佛のみこ

ころによりて淨化していただくのであります。かくて、信前にも、信後にも、煩惱また罪惡は、遂に否定せらるべき、否み忌み嫌はるべきものなることが、更に親鸞聖人の御著述を貫いて、あざやかに拜せられるのであります。

その二三を抜萃し試みに意譯しますれば、

「なによりも、淨土眞宗に徹底せずして、解しがたき放逸な無慚な人たちのなかに、罪惡は、おもふさまに振舞ふべしと、言はれますることこそ、かへすがへすも、あつてはならないことでもあります。凡夫であるからといつて、何事も思ふまゝならば、盗みもし、人をも殺すのでありませうか。そうではないとおもひます。前には盗みごゝろのありましたらう人も、御佛の御國を願ひ、御佛のみこゝろを受けて感謝するほどになりますならば、前には悪しかりしこゝろも、おもひ直してこそあるのが當然であります。しかるに、そのしるしも無い人々に、罪惡は碍けなしといふことは、かりそめにも有つてはならないことであります。——行ひは、すべて心にまかせよと言ふのでありませうか。あさましいことでもあります。この世の悪しきことをも棄て、あさましいことをも爲ないのこそ、世をいとひ御救を感謝することになるのであります。

自身のこゝろの悪しきにまかせて行へど、いつ何處に説かれてあるのでありませう。おほかた御教も知らず、如來のおんことをも知らぬ身にて、決してさういふ事を申してはなりません。」

「まづ、以前の貴方がたは、御佛の救はせたまふ御誓ひをも知らず、感謝もなくしてゐられましたが、御佛の御導きにより、今は御救ひの御誓ひを、こゝろにいれ初めてゐられます方々なのであります。前には、無明の酒に酔ひて、貪欲、瞋恚、愚痴、の三つの毒のみを、好みあつてゐられましたのに、御佛の御誓ひをお聞きになりましたからは、無明の酔ひも、しだいしだいに少しづつ、覺め、三つの毒も、少しづつ、好まず、御佛の樂を、常に好みたまふ人になつて、おいでになるのであります。然るに猶ほ、酔ひも覺めぬうちに、かさねて酔ひをすゝめ、毒も消えてゐないうちに、なほも毒を、おすゝめになりませうことこそ、あさましいことでもあります。煩惱を十分に具へてゐる身であるからといつて、心にまかせ、身にもすまじき事をゆるし、口にも言ふまじき事をもゆるし、心にも思ふまじき事をもゆるして、いかにも心のまゝにてあるべしと、言ひあつてゐますことこそ、かへすがへすも歎かばしいことに思はれます。酔ひも覺めぬさきに、なほも、酒をすゝめ、毒も消えぬうちに、いよいよ毒をすゝめるやうなものであります。藥あ

り、毒を好めといふことは、有り得ないことと思ひます。」

「御佛の御名をも聞き、そのみこゝろを心に受けて感謝することが、久しくなりてありたまふ人々は、後の世の悪しきを厭ふしるしも、この身の悪しきことをば嫌ひ棄てんと思ひたまふしるしも、あるべきことと思ひます。御佛の救はせたまふ御誓ひを、初めて聞く人々が、わが身の悪く、心の悪きを思ひ知つて、自分のやうでは何うして救はれよう、と言ふ人にこそ、煩惱を十分に具へてゐる身であるから、自分のこゝろの善惡に關らず御佛は救はせたまふと言ふのであります。かく聞きて後に、御佛を信じようと思ふこゝろが、深くなつてきますならば、まことに此の身をも嫌ひ、流轉せんことを悲しみて、御誓ひを深く信じ、御佛をも好みてありたまふ人は、當然に、心のまゝに惡事をなさう等のことは爲まいと思ひたまへばこそ、世をいとふしるしであります。救はれしとの信仰は、御佛のおすゝめによりて、おこるとこそ教へられてあります。さらばすでに、まことのこゝろが、おこりたまひしならば、どうして舊もとのこゝろのままであることがありませう」(末燈鈔)

こゝに、御佛よりあたへらるゝ信仰により、舊のこゝろより新しきこゝろへ、純他力更生の體験的事實を、親鸞聖人が、かくも親しく懇ろに教へ給ひしを、まことに尊く拜し得るのであります。

御佛の救はせたまふ御誓ひは、「悪人」のためであると、聖人は仰せられました。しかも、救はれし「悪人」は、「他力をたのみたてまつる悪人」(歎異鈔)として、お示しになり、こゝに「他力」によりて、舊きこゝろより新しきこゝろへ、更生せしめらるる趣きをも拜讀されるのであります。されば、自身のみにおいては、悲しみ、歎き、耻ぢ傷むべき、清淨のこゝろもなく、悪性さらにやめがたき、こゝろは蛇蝎のごとき悪人でありますのと同時に、しかも御佛による純他力更生による人は、「この信心の人を、眞の佛弟子といへり。この人を、正念に住する人とす。この人は、攝取してすてたまはざれば、金剛心をえたる人といふなり。この人を、上上人とも、好人とも、妙好人とも、最勝人とも、希有人とも、まをすなり」(末燈鈔)とまでに、讃へたまひし親鸞聖人の、凡夫觀、悪人觀を、かくて初めて如實に拜し得るやうに思はれます。

「横と超とは他力眞宗の本意なり」(尊號眞像銘文)と聖人は述べ給ひました。

即ち純他力信仰の一念により、「横」さまに煩惱の悪業を截りて死を「超」えしめられる救ひこそ、聖人の「淨土眞宗」の本意と教へたまふのであります。煩惱、死、すべて遂に否定せらるべきが、眞宗の本旨なのであります。

「わが身の悪しきを嫌ひ棄つ」否定の、こゝに至深の懺悔を告げ給ひ、同時に、

「慶よろこばしきかな、心を弘誓の佛地に樹て、念を難思の法海に流す。深く如來の矜哀を知りて、まことに師教の恩厚を仰ぐ、慶喜いよいよ至り。至孝いよいよ重し」(教行信證。後序)と、慶よろこびたまひし、懺悔と法悦の親鸞聖人にこそ、凡聖不二の御面影を偲しのびまつる次第であります。

懺悔、法悦、すべては「否」を基調として生まれる宗教的意識であります。「否」なくして宗教は無く、「否」は即ち宗教的生命の第一語であります。さうして、煩惱より涅槃へ、人間より佛へ、即ち「否」の道歩み給ひし親鸞聖人の九十年の懺悔法悦の御生涯は、あくまでも煩惱否定によりて一貫し給ひしことが拜察されるのであります。

製復許不

イエスカ親鸞か

定價金貳圓四拾錢

刷印日 五月二十年一十正大
行發日 五月二十年一十正大

發行所



著者

山中峯太郎

行者

家村覺四郎

刷者

谷口熊之助

東京市四谷區鹽町一丁目二十五番地

東

光

會

東京市本郷區吉祥寺町五番地

雙

樹

電話東京六〇〇九九
電話小石川

山中峯太郎著作集